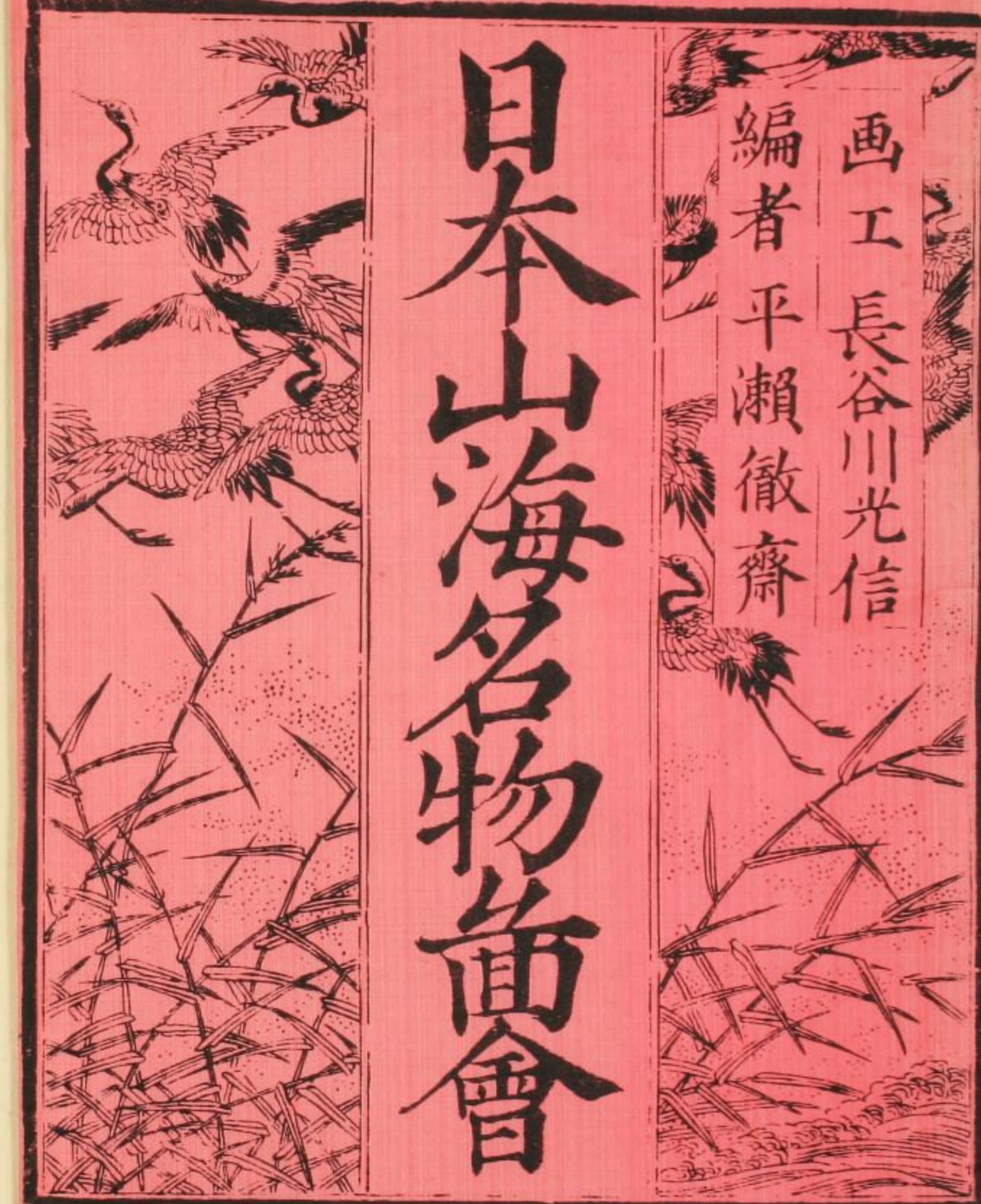


15 20 25 30 35 40

# 日本山海名物面會

画工長谷川光信

編者平瀬徹齋



陸奥守從五位上百濟王敬福郡

内少田郡仁黃金在ト卷兵獻此聞食鷺枝

悅世給布

大伴宿禰家持

皇代吊代さんと東なりみちゆく山す  
あひを以 金寶之盡さる姫國神邦

聖帝之民を沛德十世を頂戴され阿  
ら一民俗之營累々也教有又好而樂兩  
耽於有耽てなほと云事なり既小成也  
日本山海名物圖繪号之平懶氏徹齋翁  
月小編夜に録り乍くも古人古人之一癖  
を愛せれりあく強て子之手を執く  
是をといひ猶凡心は可乎と云孝子先考

之心を従々函意を毅を備闇一章  
たゞへぢ一風角之遁清泡流川片アマツ  
半也又恩小雙林一僧茗種之妙と陸氏を  
歎き宴佛募く禪指室貞德勾幸記之  
千世矣代りん極のこまう且天平二十一年  
二月丁巳東方異邦官人不眠福達一戒者  
重以子有余載扶桑時今治、也、不啻

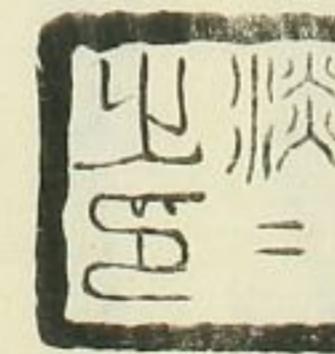
知之者且暮遇之

一箇事辭ス小月何と主人只懇乞小に  
心裏おろく蒲柳萼くわやなぎのう撓なづて

旨寶曆四年季夏一向

八十一叟半時庵

撰



日本山海名物圖繪目錄

卷之一

けまの金銀洞穴とあるは一般店舗と並く  
ありはむを金銀の物を賣りつゝ

金山城口の圖

下財

錦口

真府

銅山城通渠方の圖

東園の産新

ぬ園の御端

山苗役人

船宿

金工

木工

瓦工

漆工

竹工

瓦工

織田

三才

銅山城通渠

金工

木工

瓦工

漆工

竹工

瓦工

織田

三才

金山浦口風まき大加口

けまき

金山浦

の申れ繪

徇石くたぐ繪

山神象

洞山床板

鉛

金山淘汰の繪

狹山の絵

唐吹

卷之二

銀山淘汰の絵

釜家の繪圖

高麗大工所作

南蛮蘿

絹踏蘿

洞山子金波一方

鉛

金山淘汰の繪

狹山の絵

唐吹

緑青縁青製法

繩織製法

豆腐約柿

大和清所柿

梅州木澤干瓢

茶製法

信義

茶

江戸四日市蜜柑市

緑青縁青製法

豆腐約柿

大和清所柿

梅州木澤干瓢

茶製法

信義

茶

江戸四日市蜜柑市

尾張太根 津戶移り主太根  
刈利屋方太さん

排列金鷹太根  
排列白口太根

卷之三

日光猿櫻 志越猿脚の筋

仙臺馬市 穀は東京の通り

とくづくまうじ

越前福井石橋 甲斐石橋

献あさき書 まか城のあとと

くわくくわざれ

様脇製法 甲斐石橋

讃岐牛角蟹 本文蟹

竹村蟹 浅經蟹

池田岩

佐古浦波干 白木川

博庵丁 山上文庫宣布

官戸淡革手紫菜 とくのえ

とくのえと

京西洋鐵盒

御布丸の  
名とまろは

とまろは

博庵丁

津軒制法 うつせんのまろは

とまろは

排列牛野館 地若美

天王寺千葉 あは今文の差と

すとまうのす

豊後河太郎 豊後小豆生よ四

大坂瓦屋町 丸のゆういん

とくのゆういん

佐渡江 佐渡のやうまと

薩摩太郎玉砂糖

白砂糖  
馬砂糖

大阪小瀬羊市 正宗市

晒輪 薩摩備

佐中備  
佐中備

卷之四

佐吉宣市 九月十五日

三輪索麵 長か佐引の石窓

とくへぐるわ

佐藤牛房 八幡牛房

松烟 油煙

松油

天王寺牛市

体あ倣中よりのが  
牛の身と牛

京塗茅太墨

トリうけの故に  
とまうけ

安藤雲官鷺市

六月

えぬ松葉

すずめをも  
ちゆめ

有馬冕

駿河竹細工

かく良物

お津物

伊吹艾葉

アセモアラジイの  
根の身とのり

河内小山園扇

あらわらわ  
おあらわ

仙臺紙子

モカシヨウラウチ  
紙子の身とあらわ

毛馬松茸市

モハナガノコ  
茸の身とあらわ

石門芋干飯

卷之五

河轆

川海車とすらひれ  
水と浮ようりに

八月桔船

キビアキ  
船の身とあらわ

淀蟹

淀のあ車

瀬田饅籠

日向のあ車

江納

河船

兜貝

しとちと

尼崎鳴貝

海船

章魚

小八指魚

石鹽

鰐網

修羅空和筋

拔魚兒

井

赤鱈

海參

鯨

鯨とあはれて大どと一傳きよナシ人よあざれへくわらある  
いふいふせ然ゆ浦よて鯨と川作りとうてくわく  
をあそとす車と大召門兵下経よあへてこよのむらきり

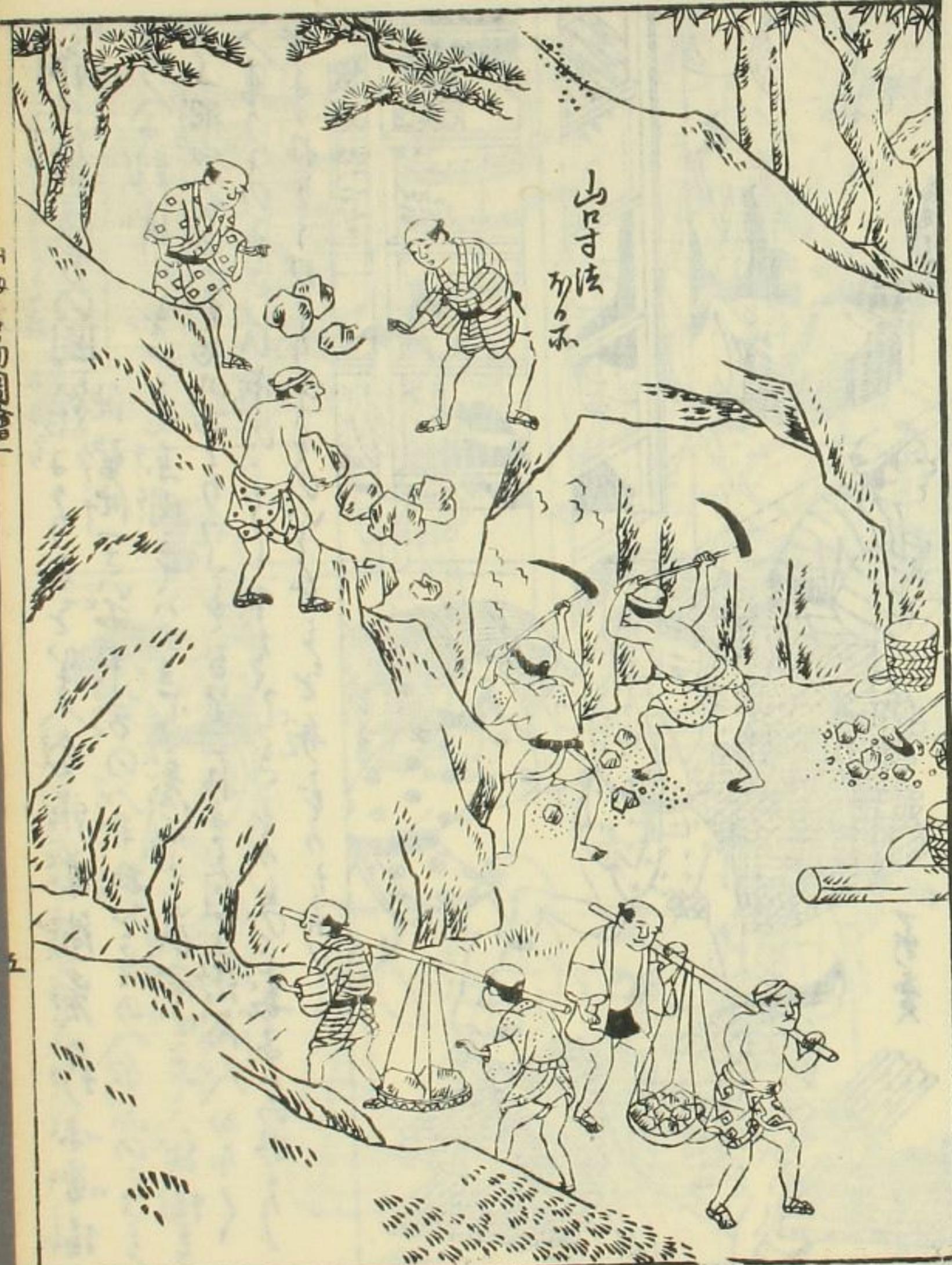
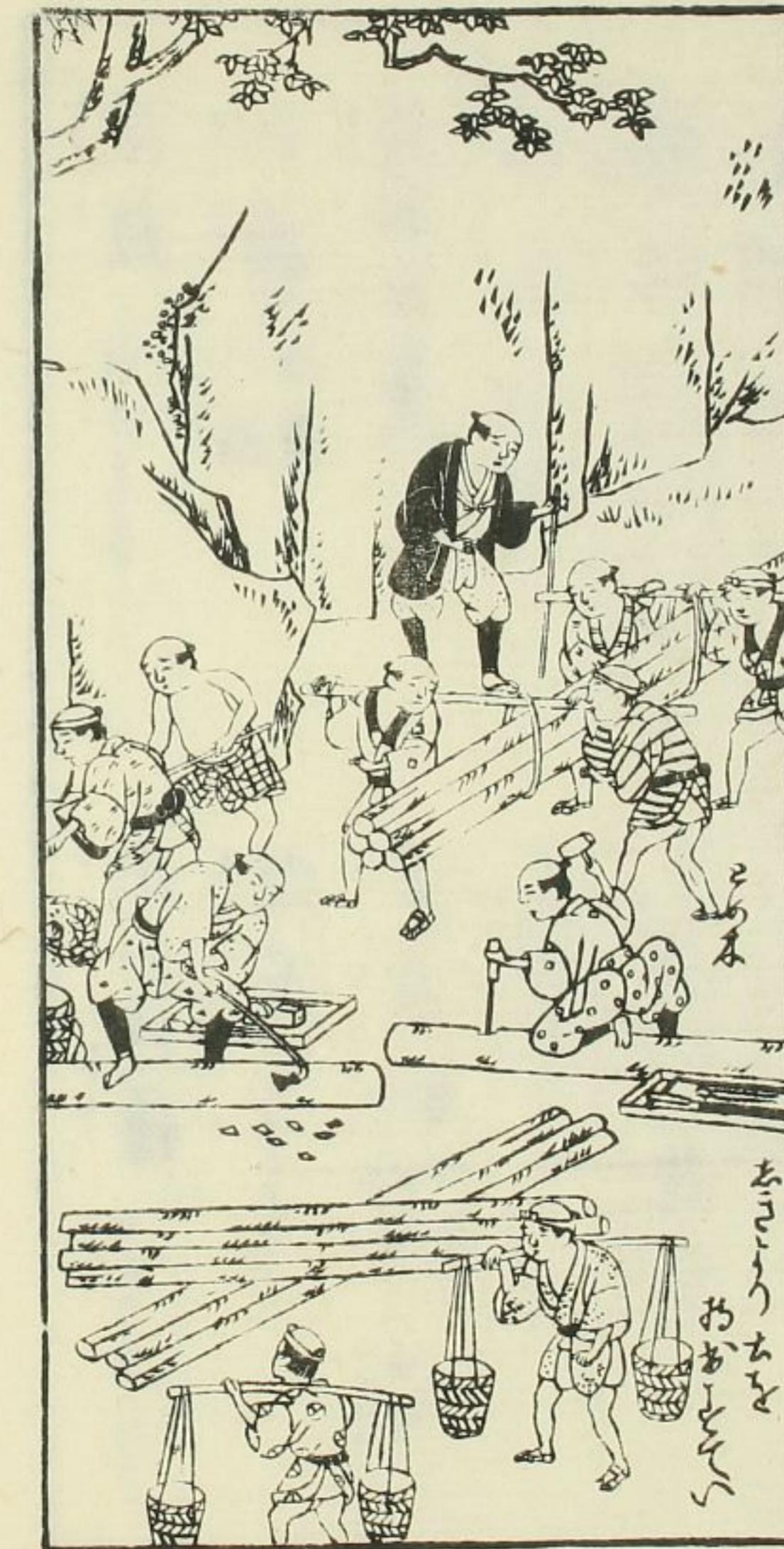
蘇窓見

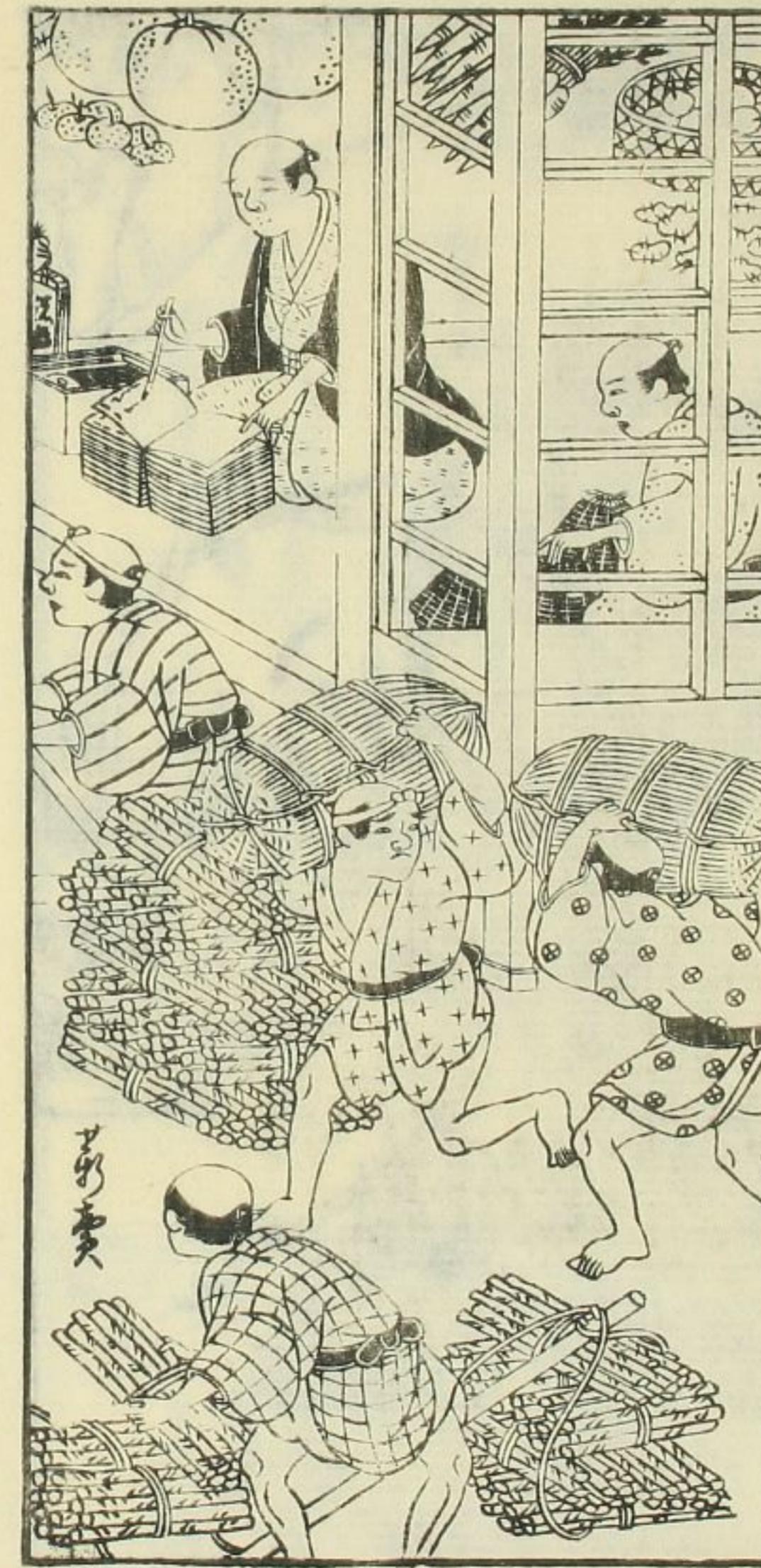
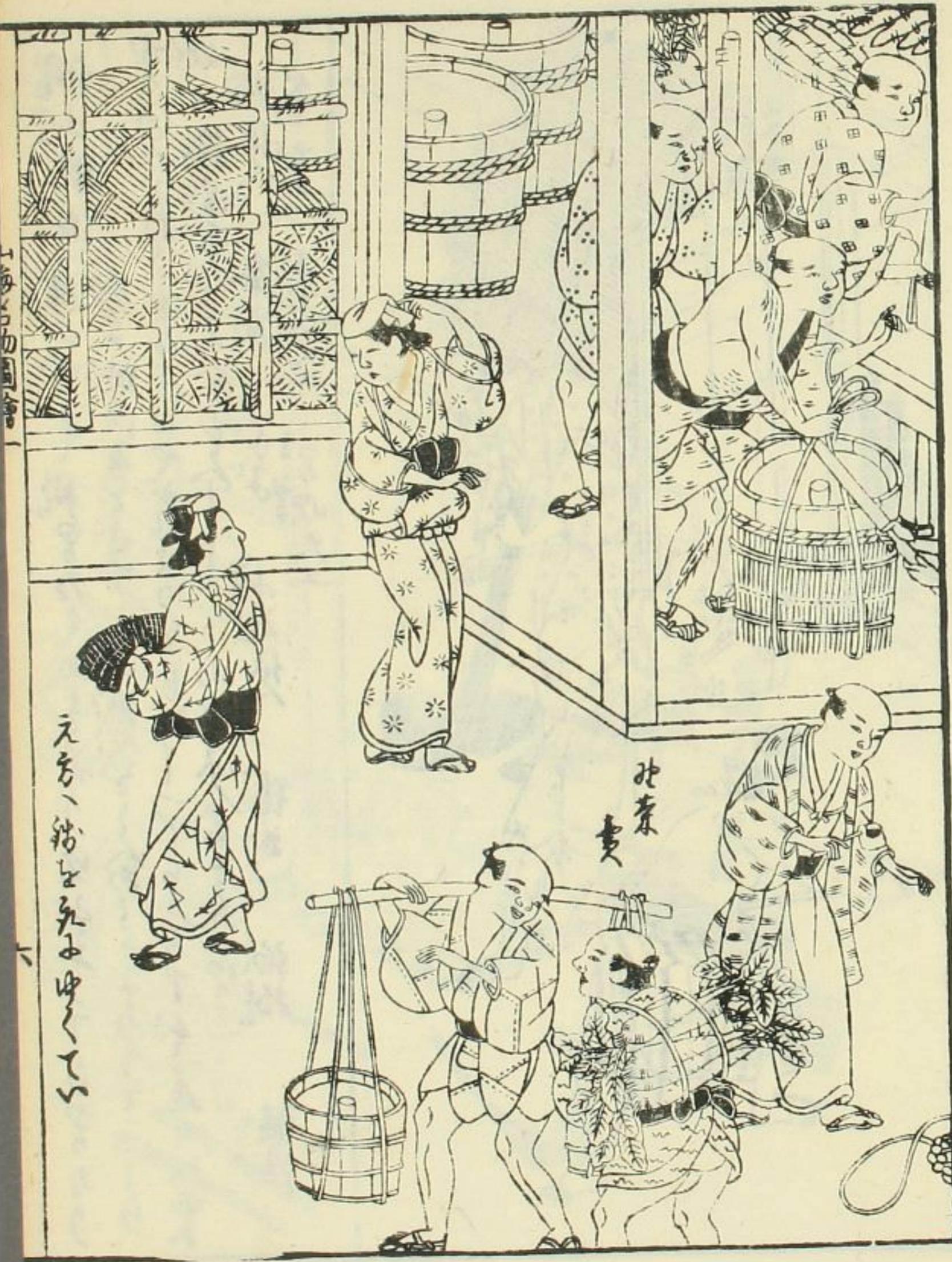
蘇波と吹器

蘇窓網

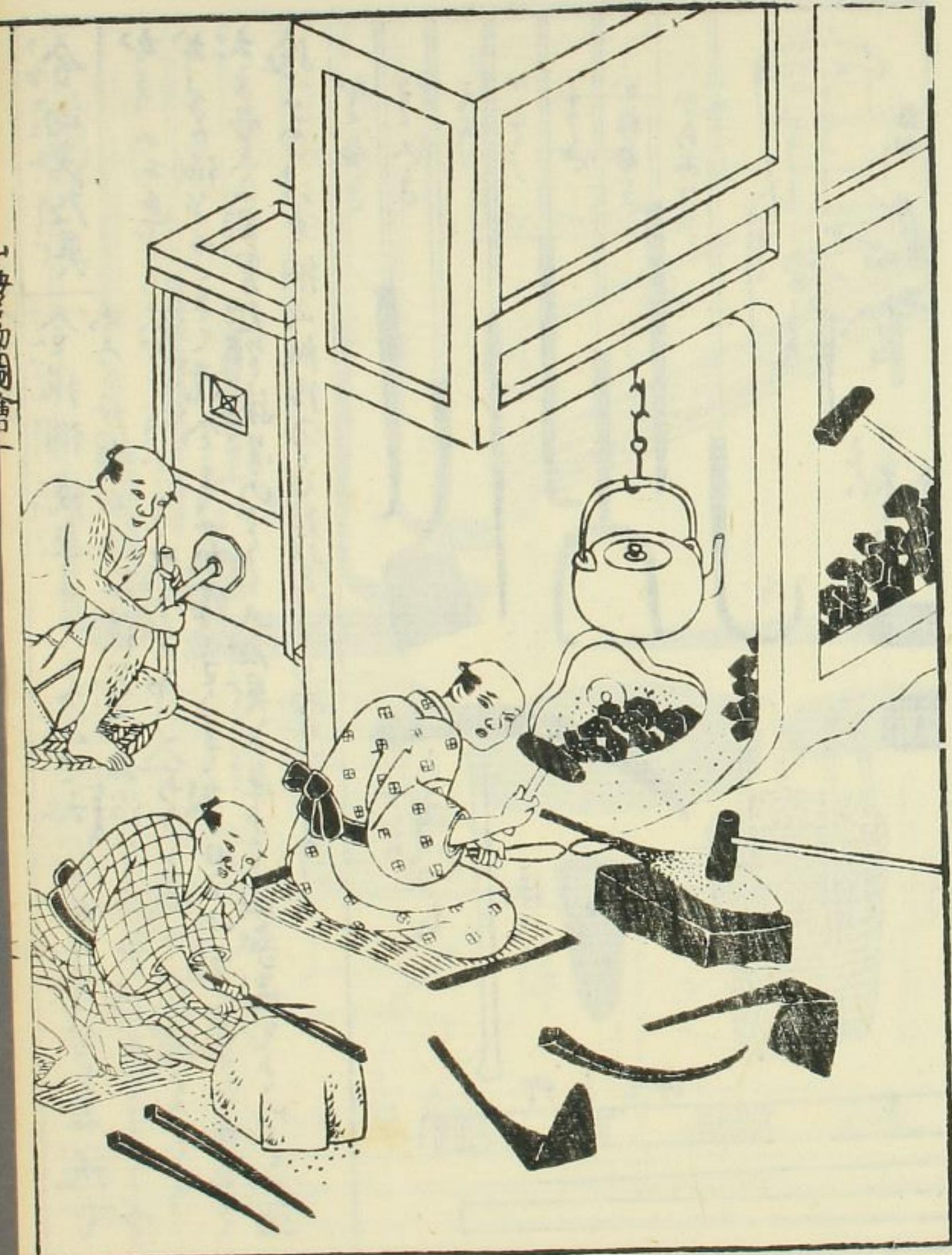
金山塘口の圖

今山の塘口を浦にすゝまし、眞府より右月をかづび  
ト伐トシテ九金鐵鉱石を取て、萬石よりからへくみのち、さら人を  
人玉に十六代、彦國天野天平、鎌室中よもめで、陰奥の山、うりあ  
石と、御源人、室に十代、忍成天官の山、うりあて、対引の山、うりあ  
山も御放ハ神代より、既ト云傳へたり





あうねやまちうきうーこべ  
御山後方の圖



洞山雅治  
補の中を利害をあきらめり居ふそうらゆぢ  
缺と假名をとてその威人をうあくよ居をうら  
ゆののみあらどとおねやざれりをむけつらふあすをほせたま  
次と捨てあり見合しとく  
谷大工  
妻嫁大工  
妻嫁大工  
妻嫁大工  
妻嫁大工  
妻嫁大工  
妻嫁大工  
妻嫁大工

今山諸工具

金破洞

後垂

と云ふと

金ハ乞ね破も  
あらぬ洞ハ乞ふね後からがお治しまひばねへづきもアラフ

かうやもあじゆ太やうハ内ドリト也今をあつ入ちるを補とひ補より  
おとし方とくきて燒火キテ中た湯ヨリテぬ、ね仕あがへばあと床あと  
おとし方とくきて燒火キテ中た湯ヨリテぬ、ね仕あがへばあと床あと  
おとし方とくきて燒火キテ中た湯ヨリテぬ、ね仕あがへばあと床あと  
おとし方とくきて燒火キテ中た湯ヨリテぬ、ね仕あがへばあと床あと

詮よりうと洞山紙のとたひト一らやうふなう

かき魚さ

さと

まく

口さ

まく

かみ屋さ

さと

まく

まく

まく

まく

まく

まく

まく

碎づち

縫八

縫八

縫八

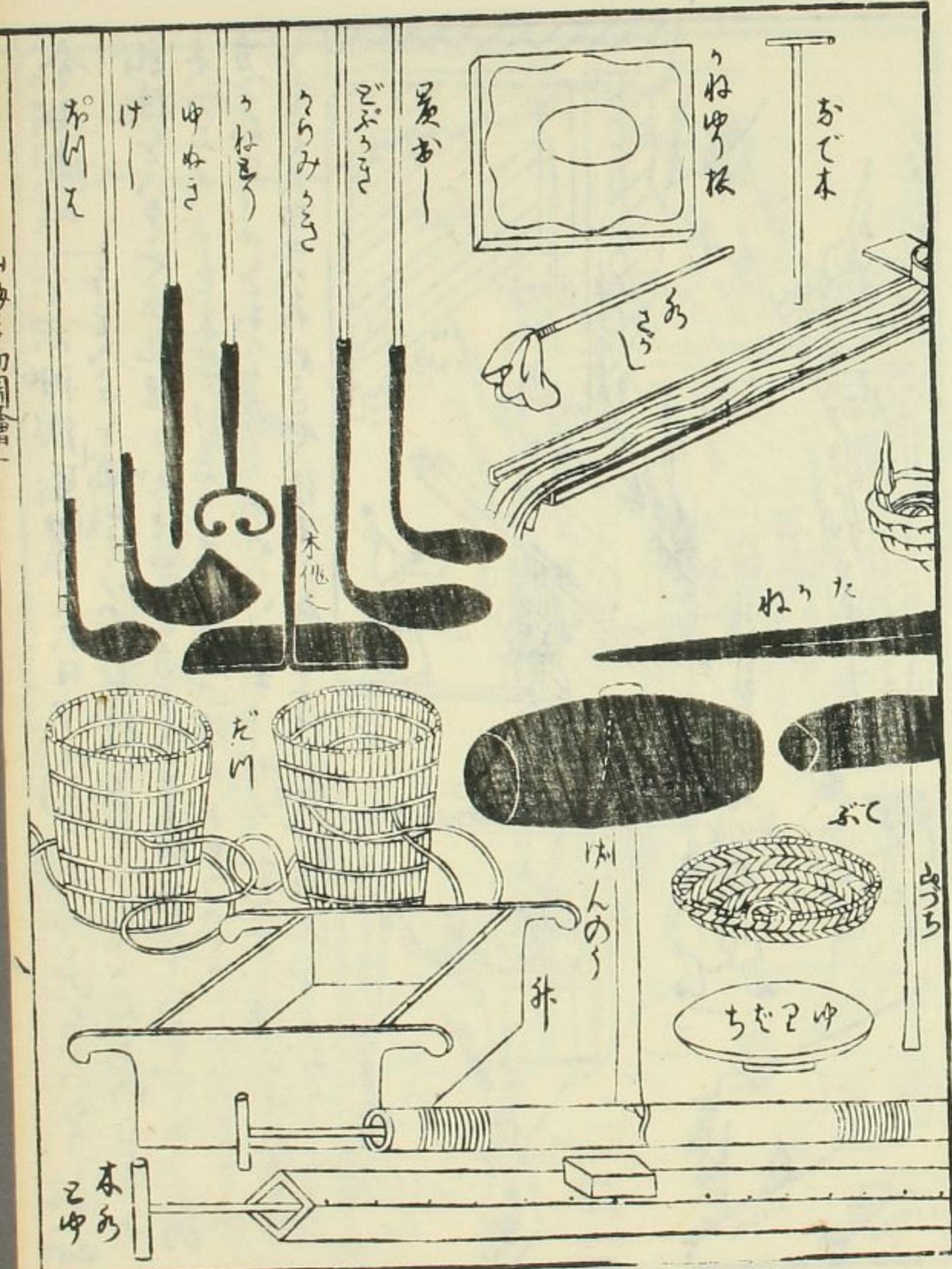
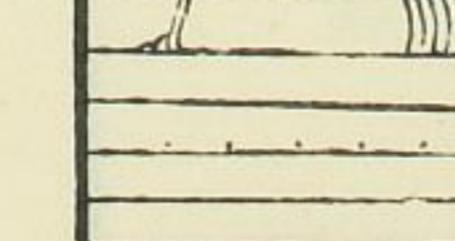
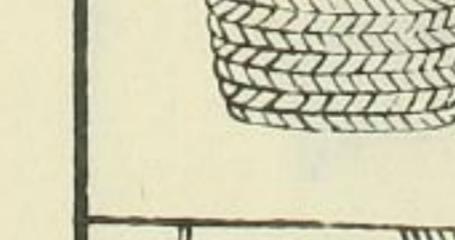
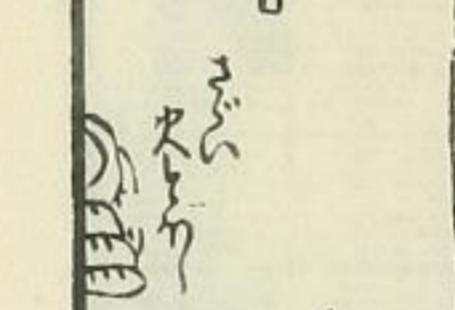
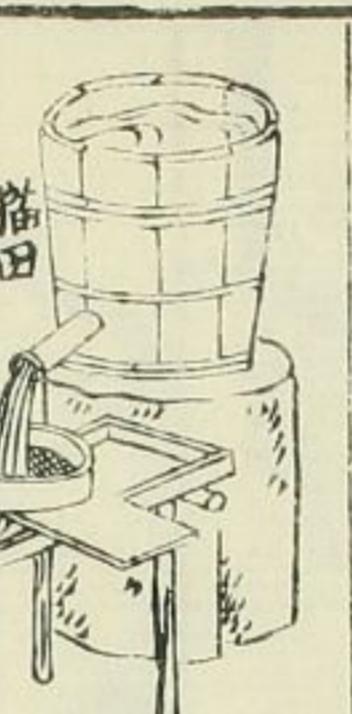
縫八

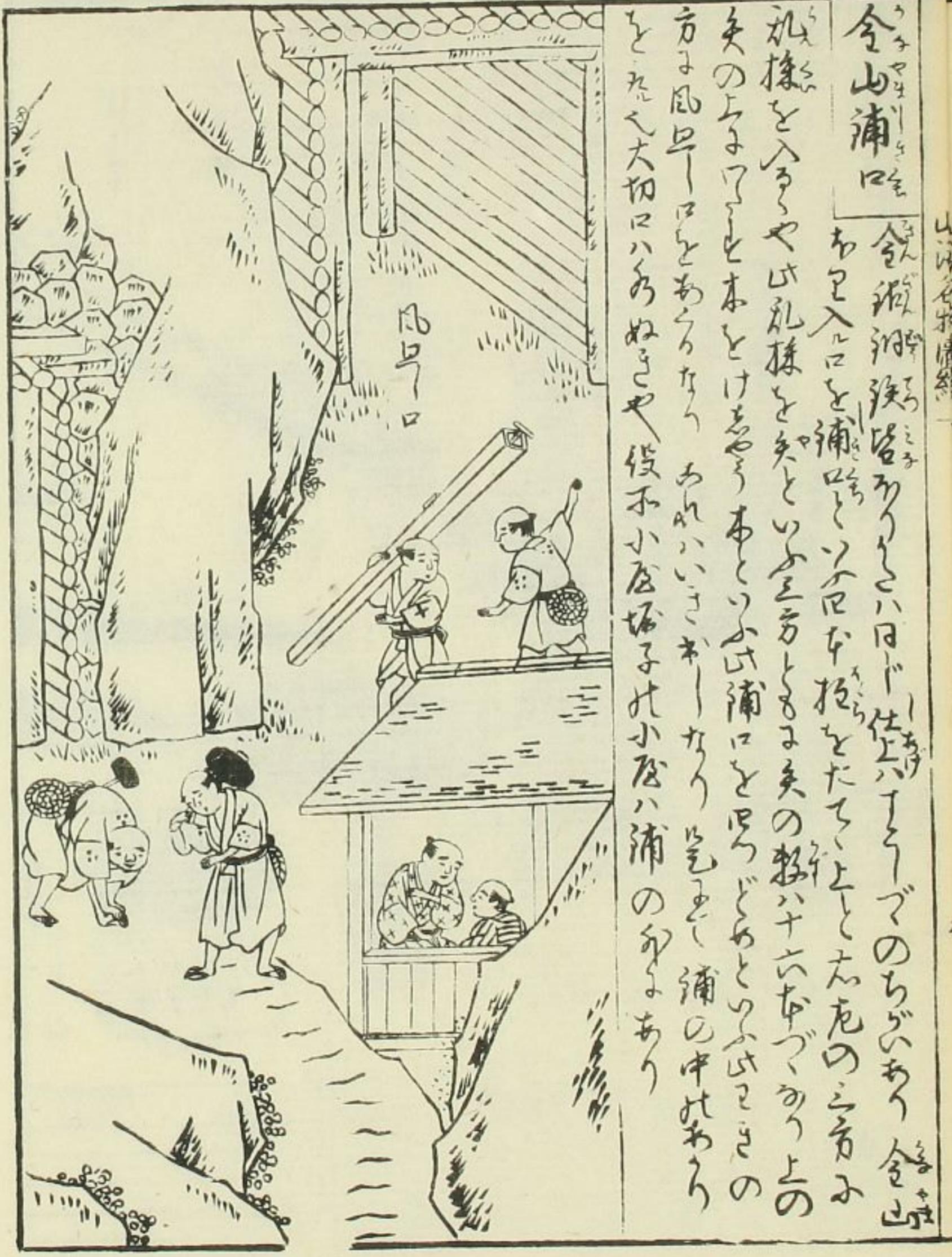
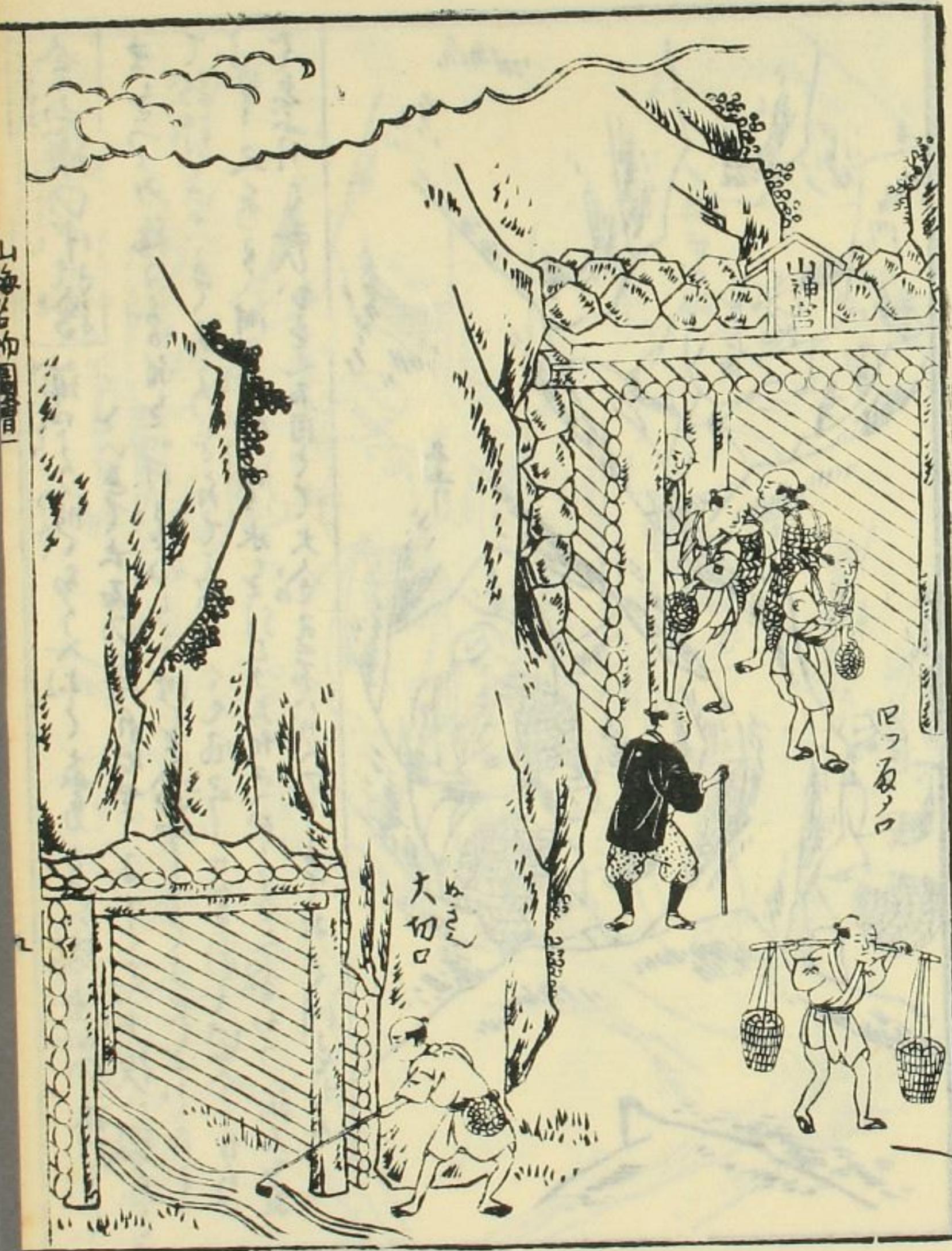
縫八

縫八

縫八

縫八





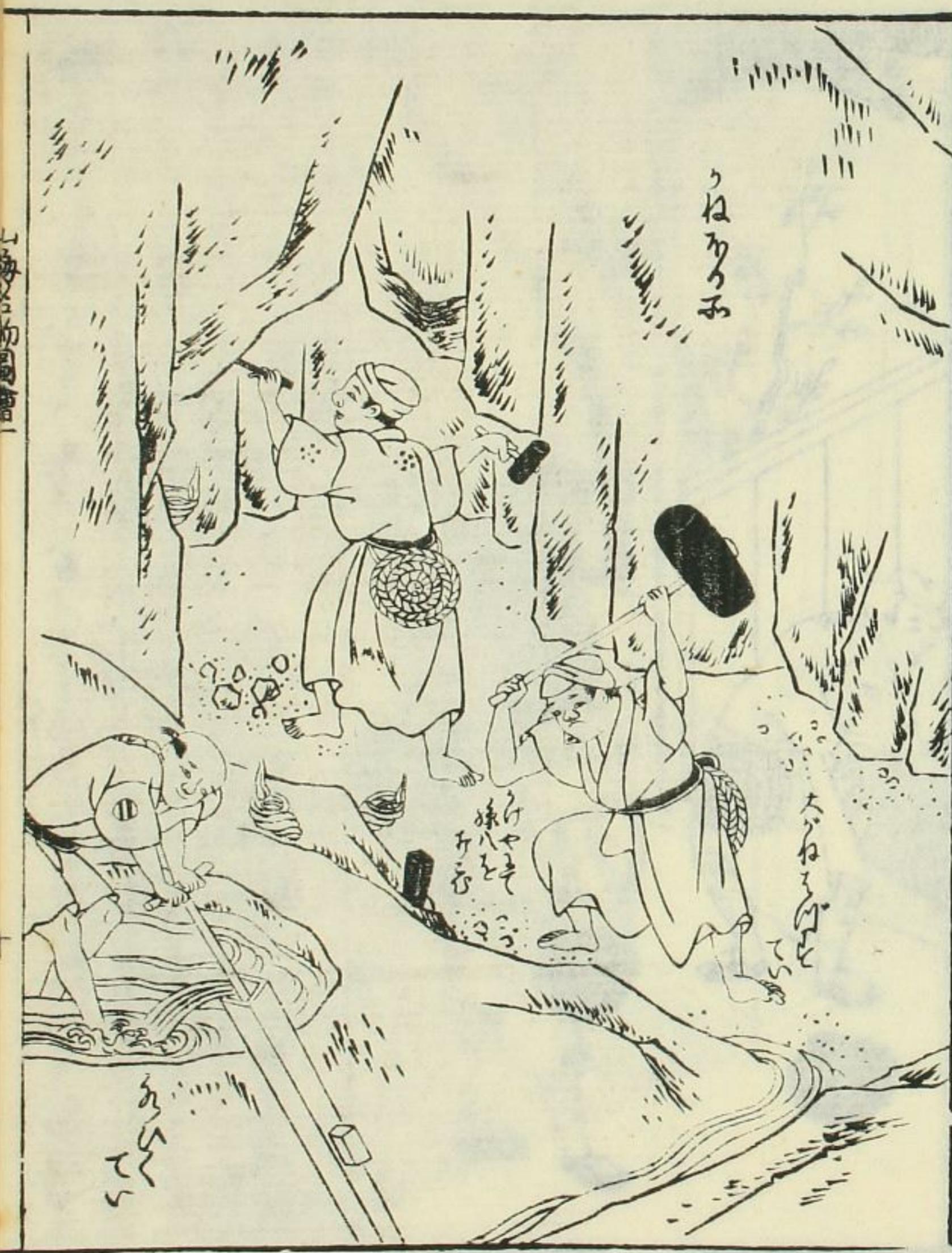
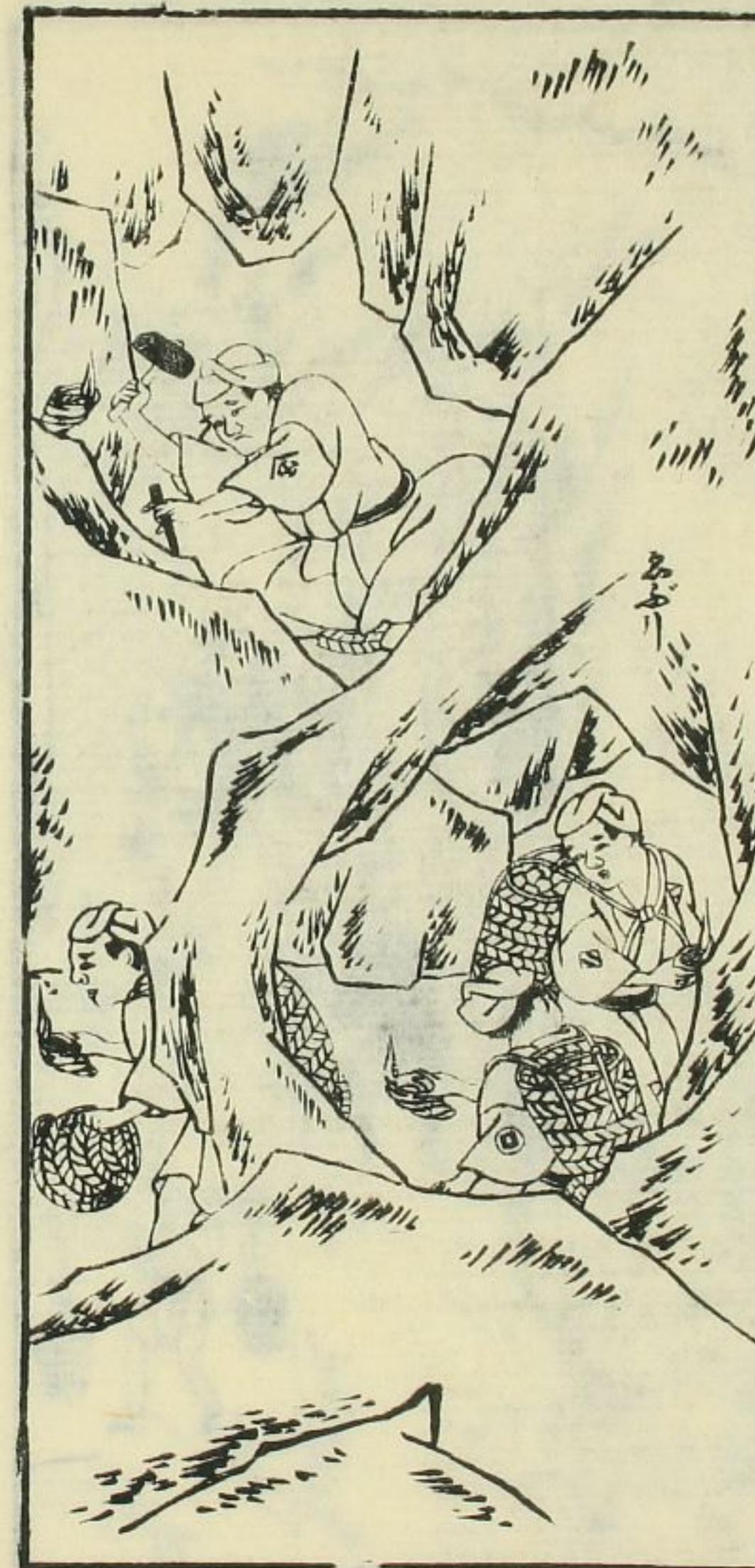
金山浦  
八五

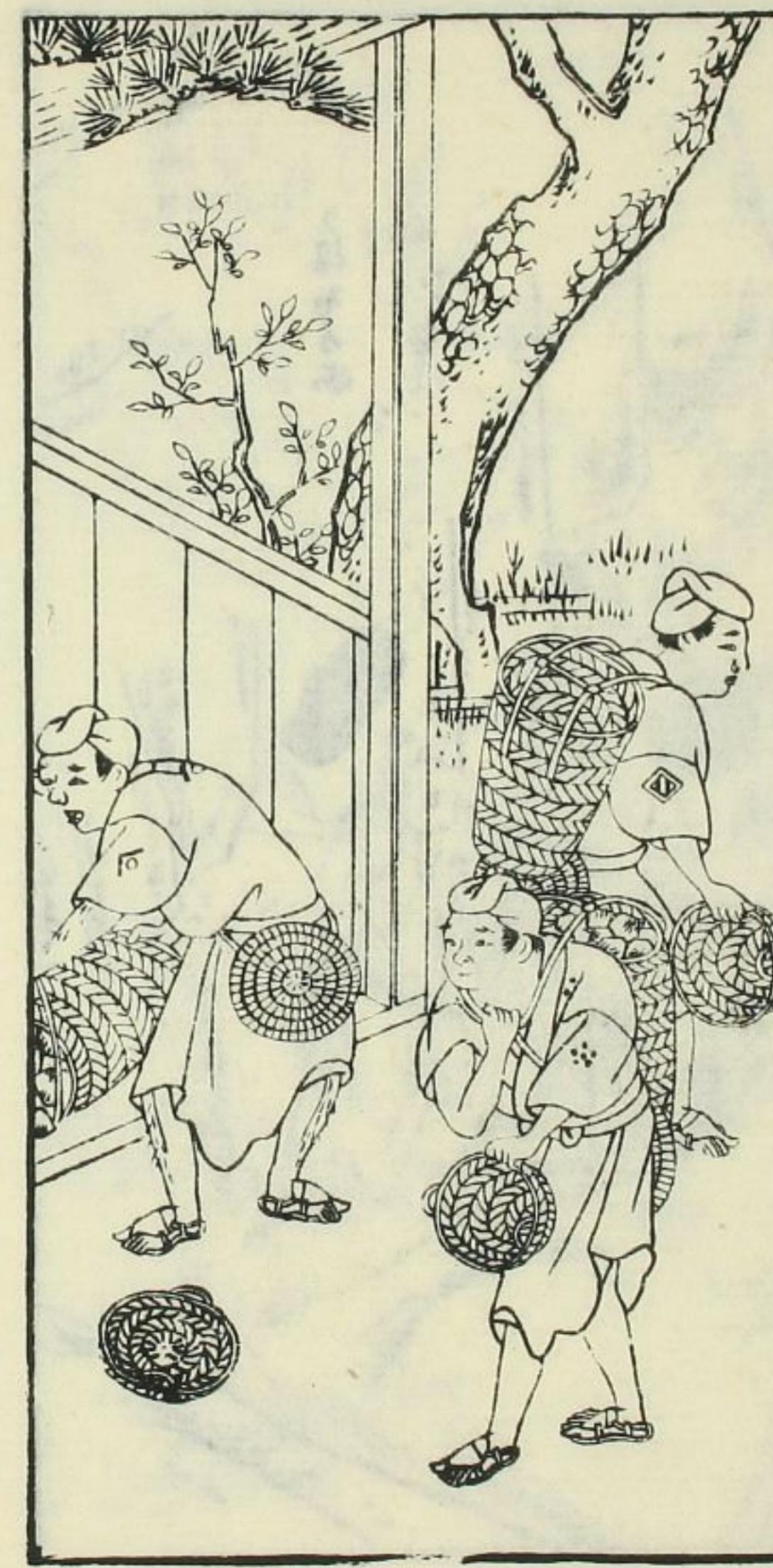
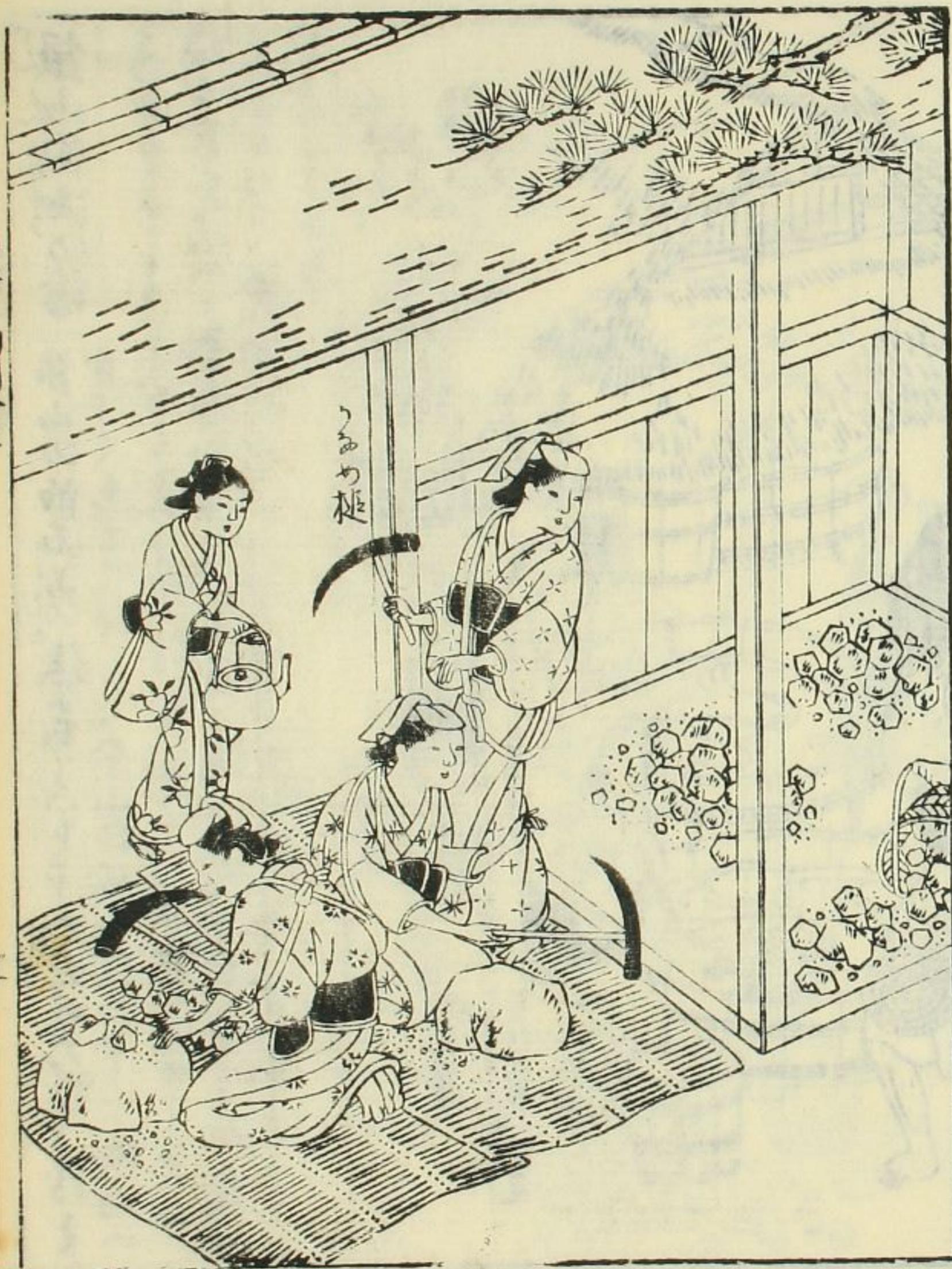
金浦の山口を入りて浦口と山口を抜きたてとよとお虎の方より舟を入らば礼様を失ひまことに三方向とも矣の船半六をつくしと夷のよつてと本とけもまう舟とひび浦口と山口どもとつはきの方よ風早一石ともうなぐあれハいさキモーかく色と浦の中れありとれへ大切にハあねきや役不小店宿子れ小舟ハ浦の舟もあり

金山浦の舟打

浦

浦より傍から入上と並んでハル浦の漁村といひて大石のくれぬさすすらシトツツハ船を  
まつみ縄を繋ぎつけましゆくはと入港するよ大とて  
てお作はば大車もあらうとれてくと風引にかね水をせしめへり  
て又ある時ハタ便と水を引しがちかはむと之食ひて船ふと立  
を名よりあがおと之石舟とて大金玉不ばぐのうとておと川をな



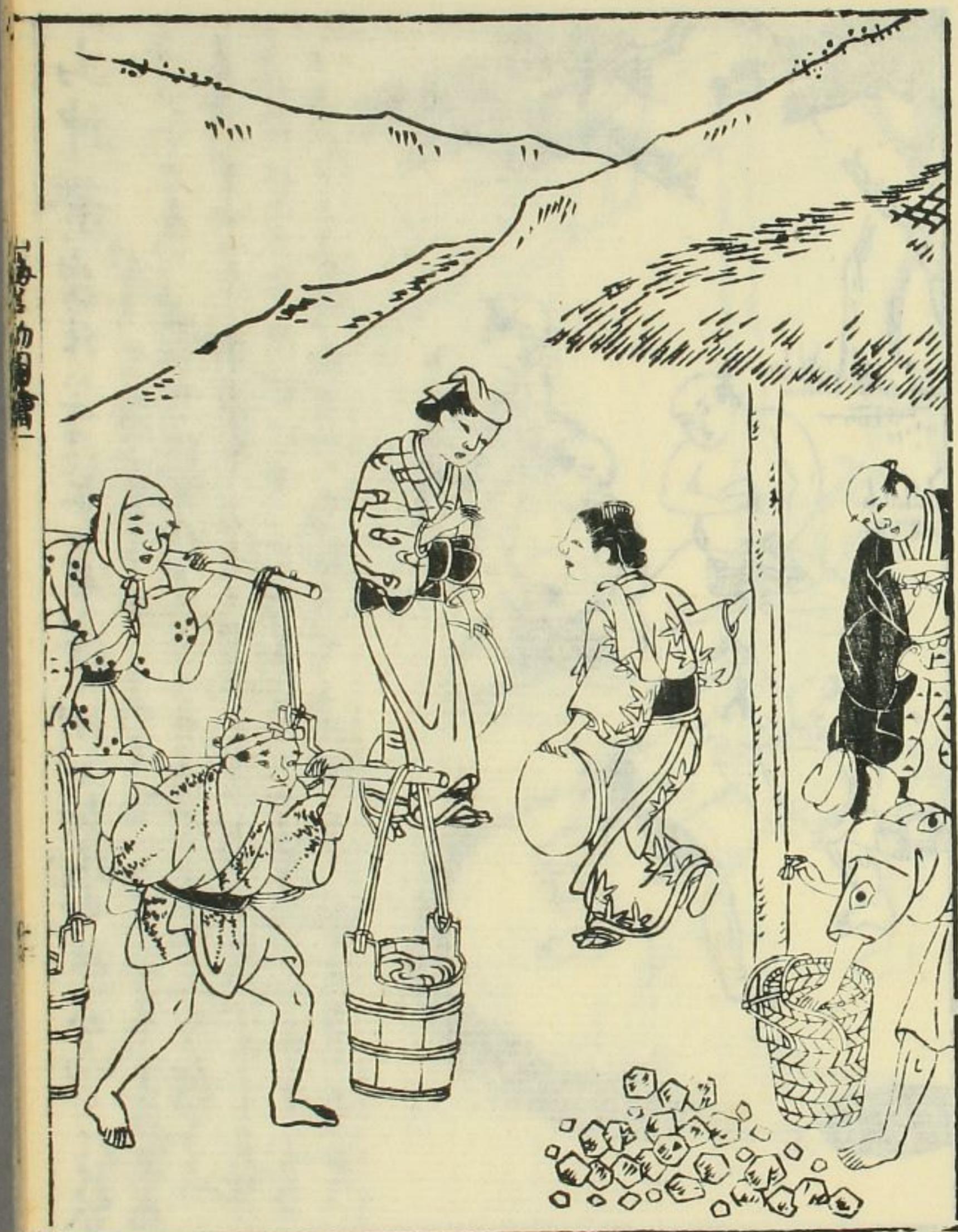
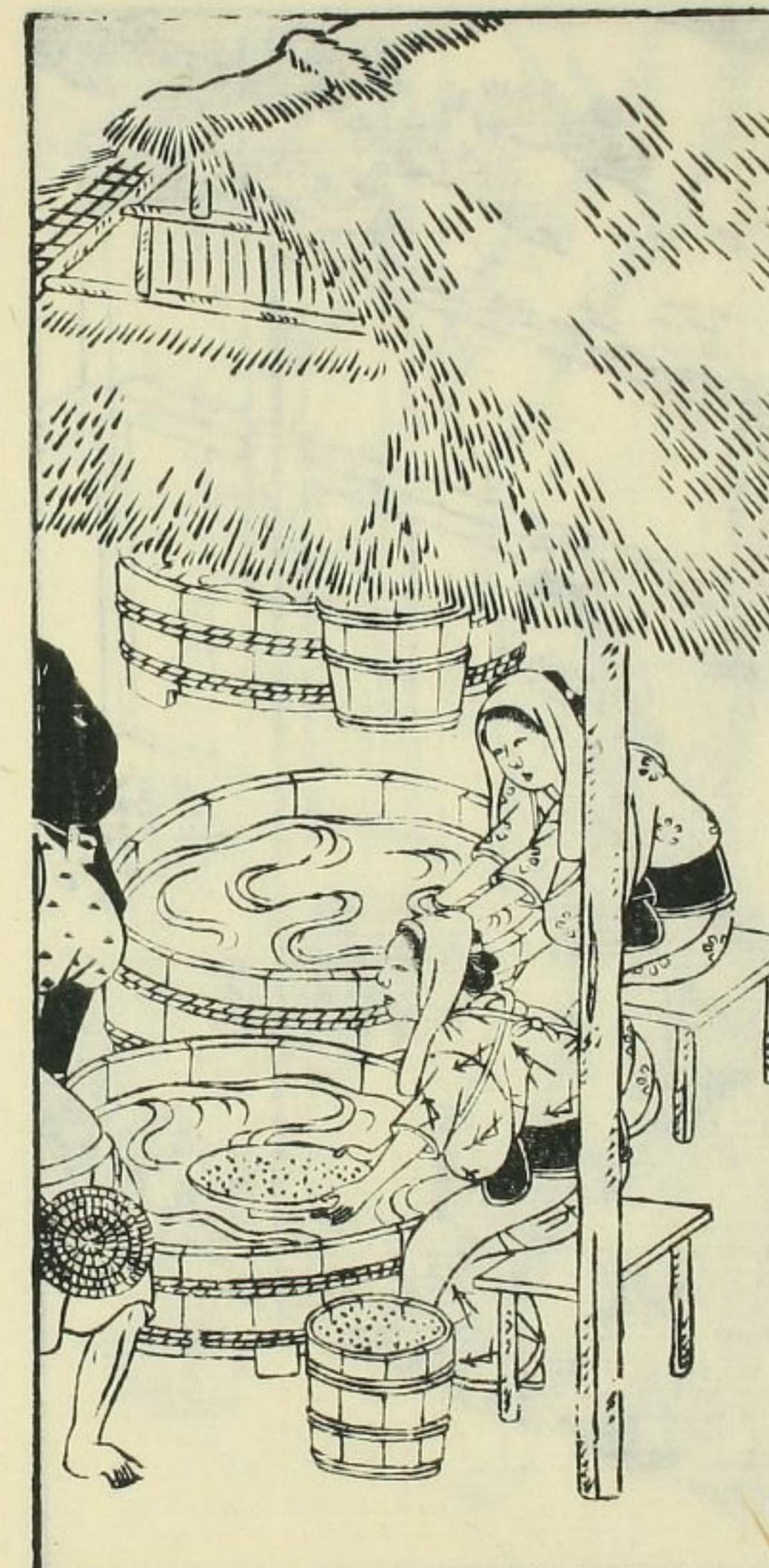


鉛石とく繪

すうりあつお一トドリ鉛石ともちがてうちぐく  
こじとくあめとくわくすの鉛石ともちがつらとく  
鉛石ともちがいわくはせの正字なり鉛石入て鉛石くつをあどゑと  
ふゑのひ字ハまき運かど又も鉛石の字正字すあくど鉛石  
金鉛石鉛石のとくかう字重みいもく鉛石古猛切音礦金銀鉛  
石也とありすま鉛石

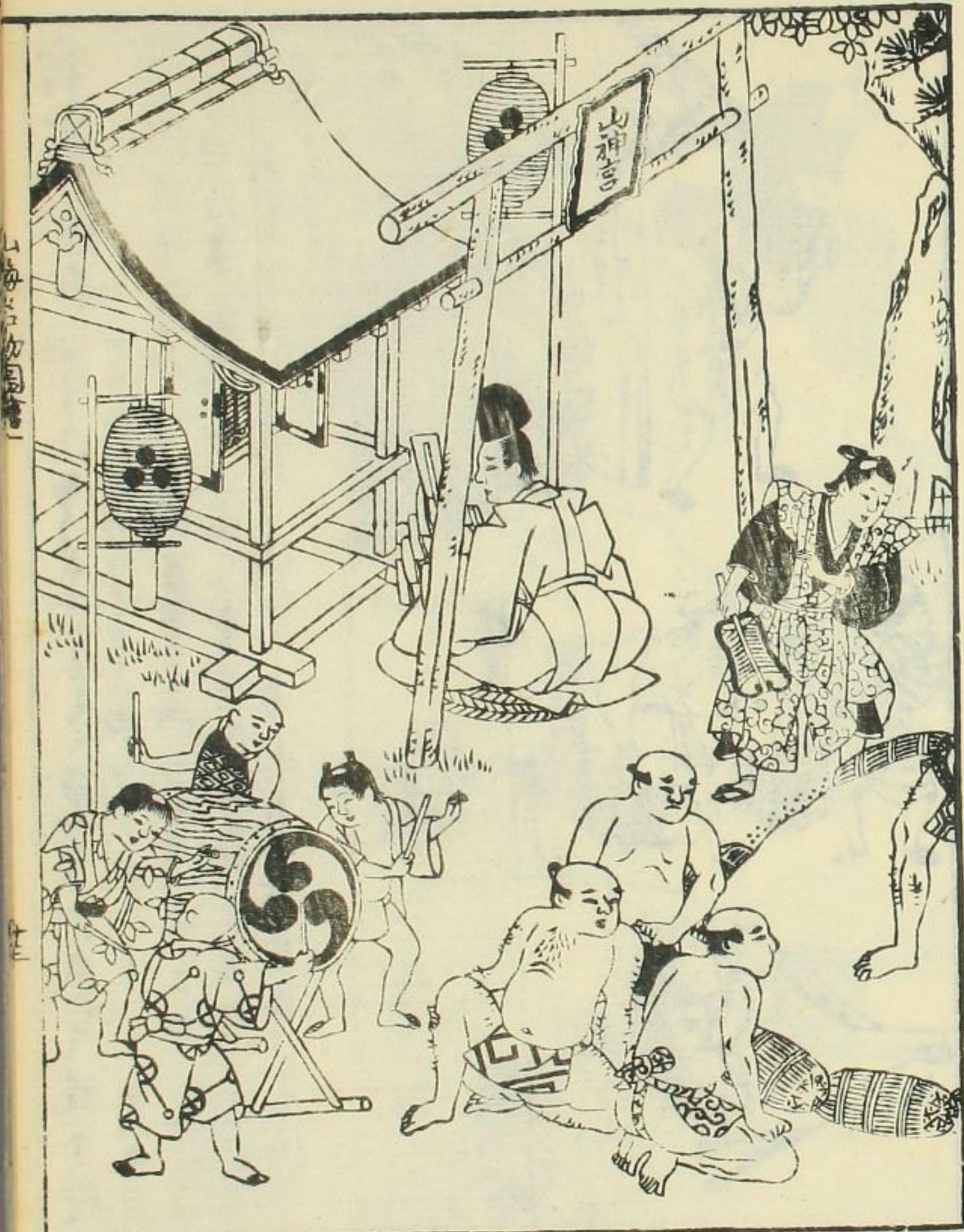
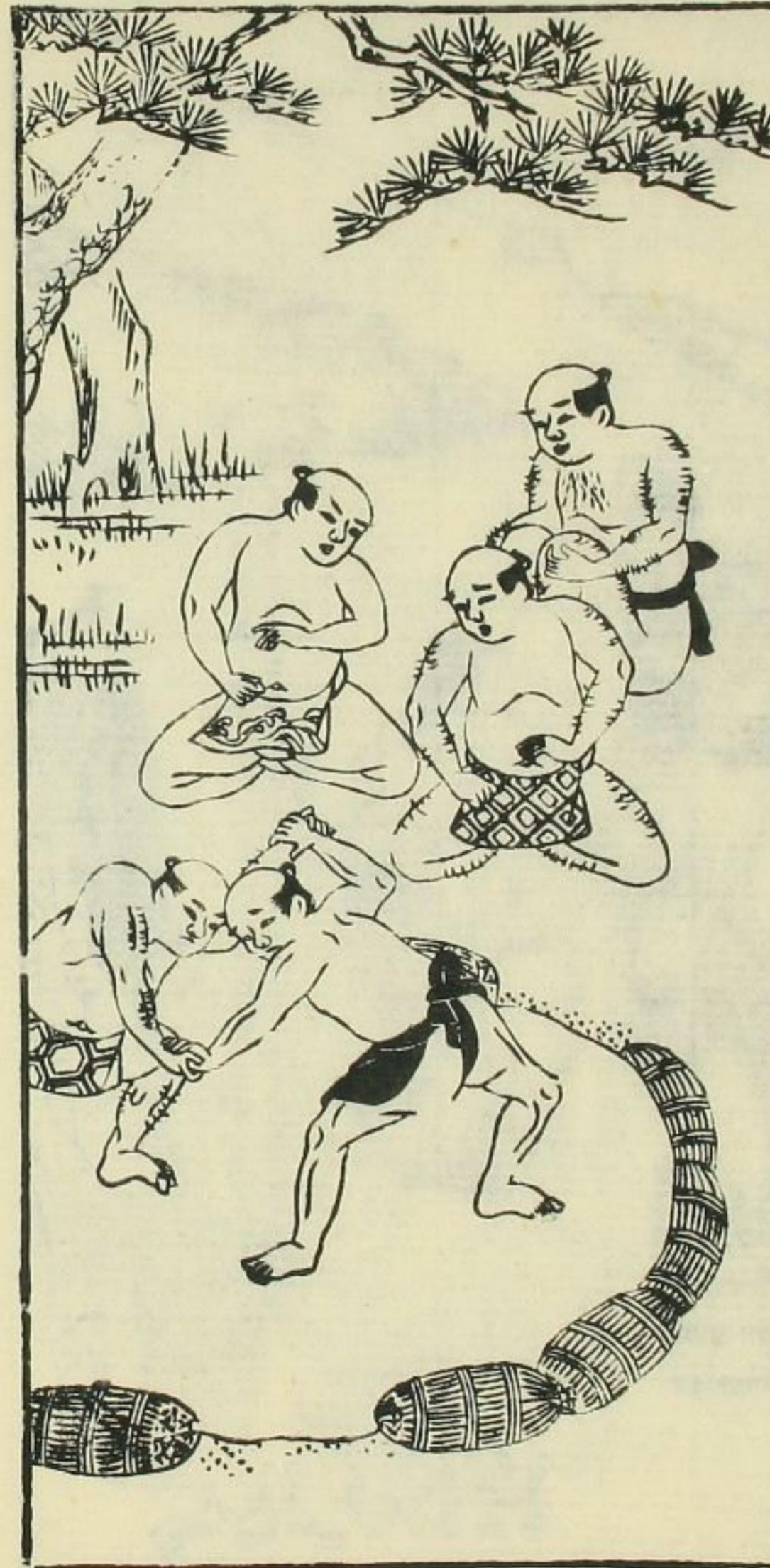
**銀山淘洗の繪**

張山の治石上の絵をあくへと下くおがにておと  
あてあみてゆうて金山の板やりのどり經洞（けいのう）  
あゆをふしきとまく車よ燒釜にてやくく淘洗の仕事（しごと）ハセ  
桶（おけ）又あを汲入（くきい）あめ治と洋（よし）あにてせれハ去石ハ管す切葉の  
あすぢて泥（なづ）中（なか）にのこうなりたいていは金山の板やり



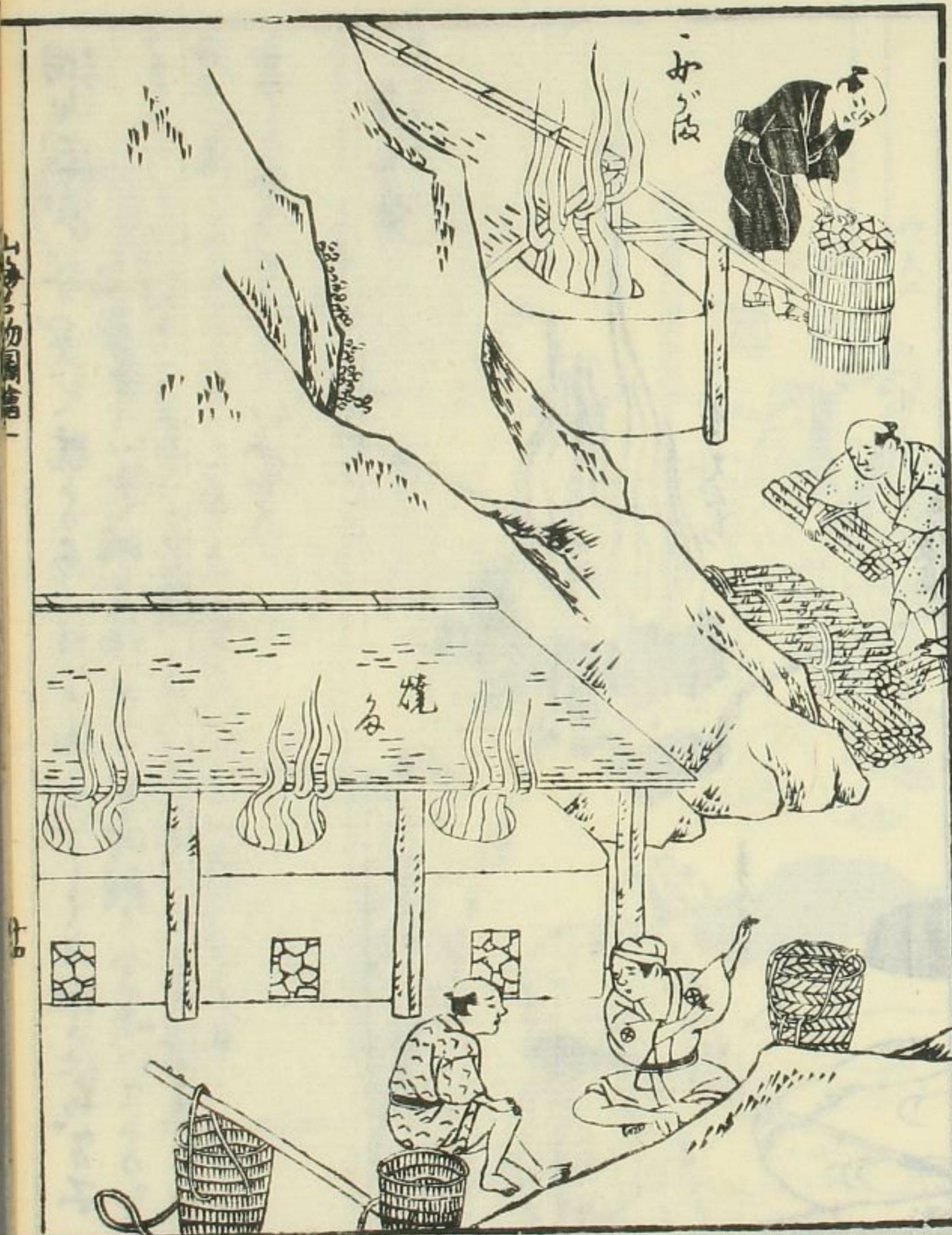
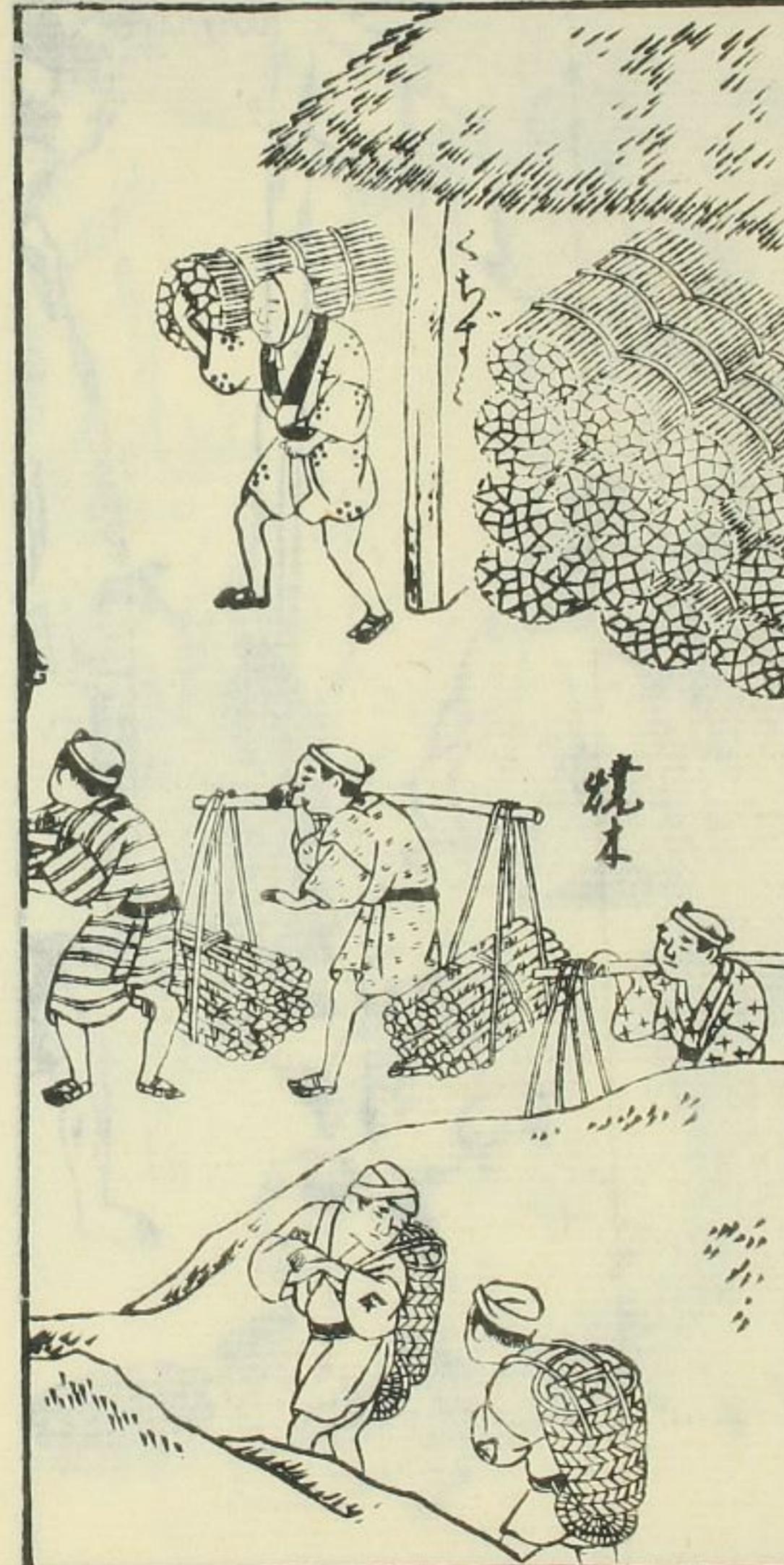
山神祭

山神祭は山の神にあをさうびて社を齋集せし者ハおのくれ祭りにてまつる者也。かゝる日は家内慶祝の事也。是故に高き木立や樹木より奉物の男供さんとされをわうと候あらんじて、よくあ門前にてまつる。ひ甚社の大神ゆきよと申す者もあらず。神主御子すまかきと申す者もあらず。がほくも御まつてえたやうなり祭ハ九月たり。



## 釜家の漁業

網すりあらびくるも、石と水を並べて続釜で  
えらう。律歎志より多く凡津度至玉網と用ひたがまゆらがねは  
て操湯事異のものよ前と較べてやねの風のうちの形と  
あらわすとあらあらうして廣く賣買交易があるを  
言ふといふ。

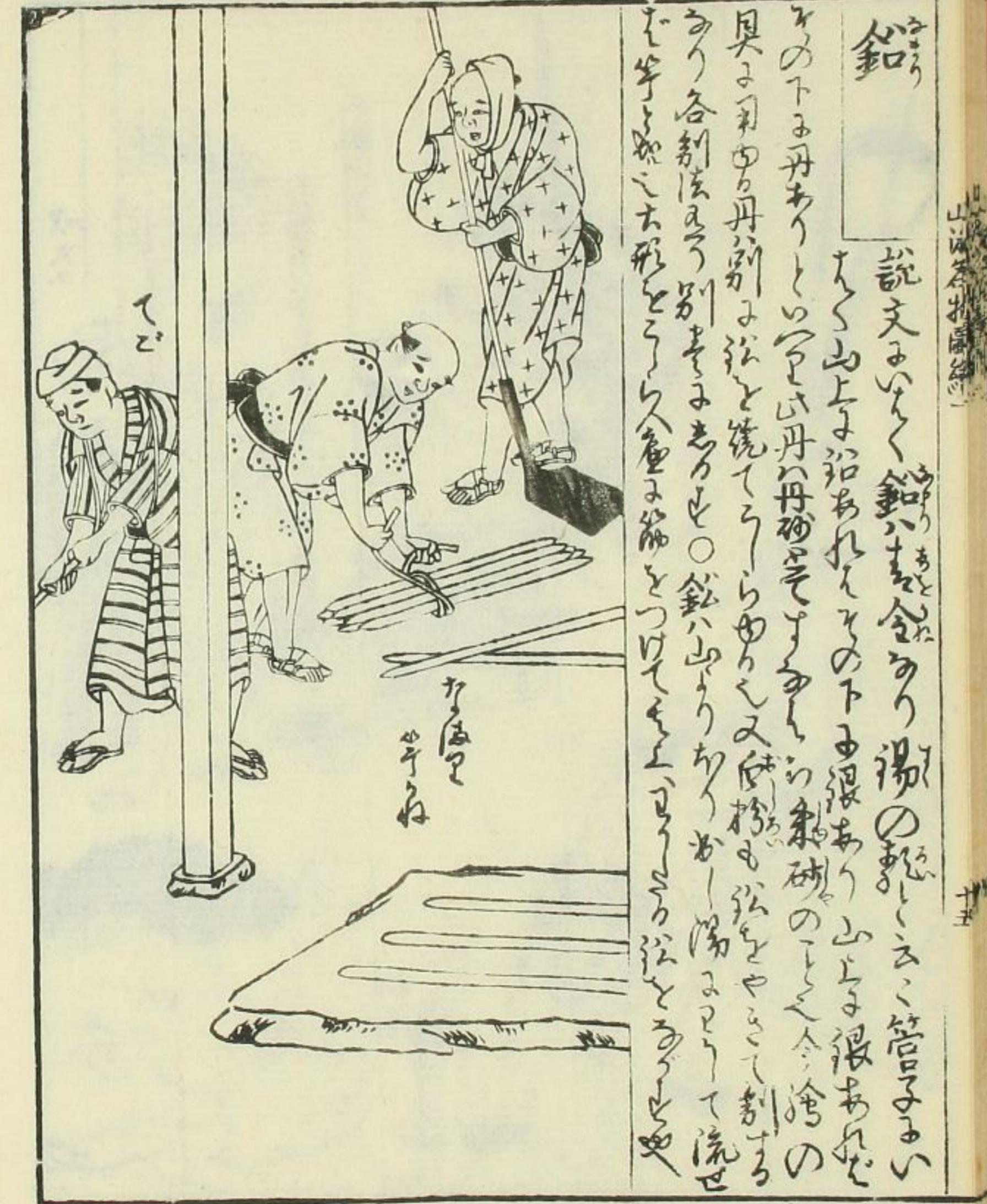
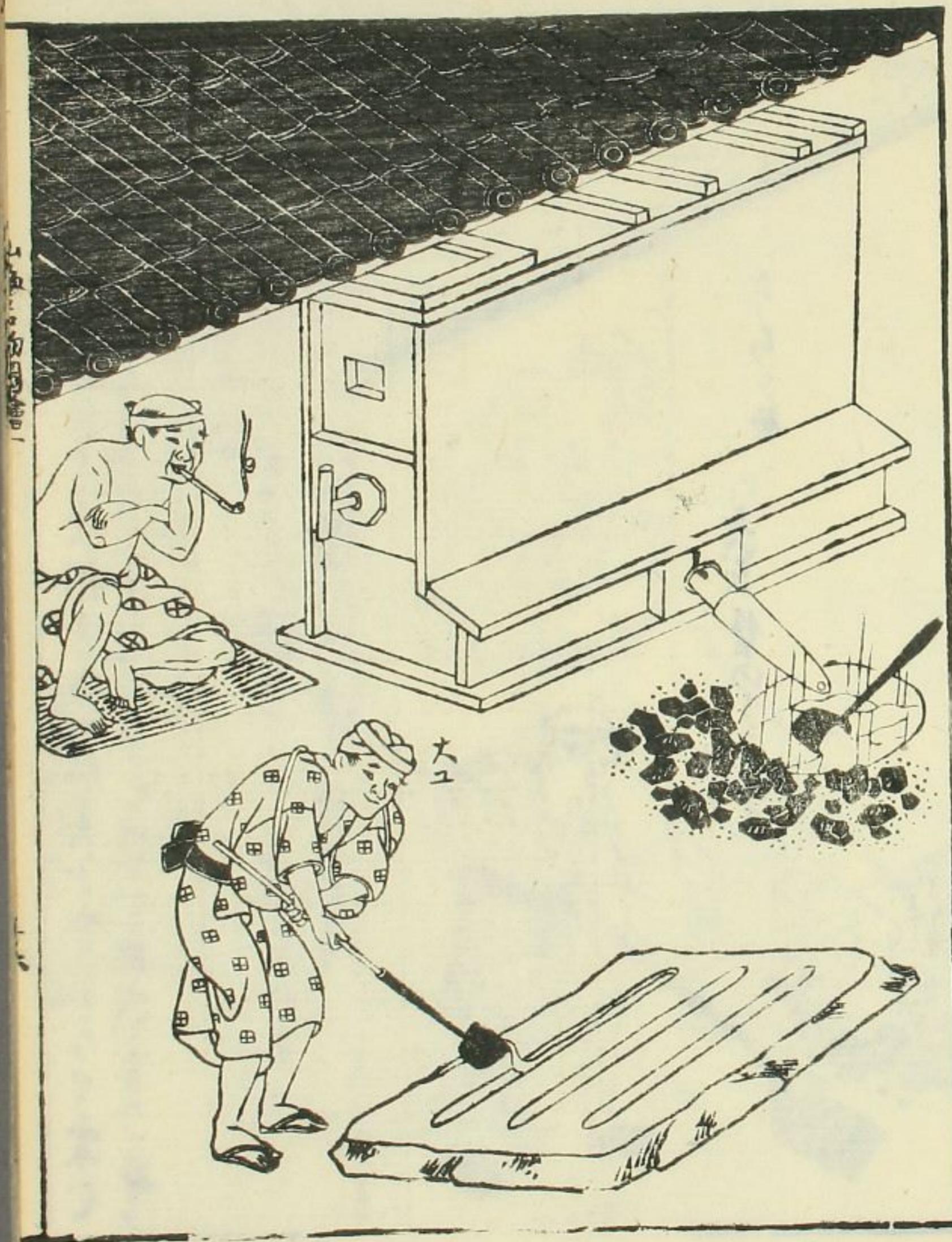


洞山床家

谷家にて燒き方あるゆゑを湯よつて丸網仕あらふ  
と床家といひて洞と湯すことを時洞うなよ吹いでくろを  
ひそむとひ又そこよりかくらのうわとことぢうともそ二三あう又  
石火の湯とかくらのうわをうわかとす又いがるよつてくらもく  
ゆまとゆまとせふうといひあり

たらせ





鉛

説文よりく鉛ハ古金なり湯の邊に云々管子より  
山より上より鉛あれと云下より銀あれと  
之の下より丹ありと云は丹ハ丹砂をすかし  
奥より丹砂ありと云は丹砂をすかし  
きり各別法あり別名もありと○鉛ハ山なりかくか一湯よりうて流せ  
を牛と號して大形をうけ入龜より筋をつけてもよしと云ふ

真輪太玉西宿

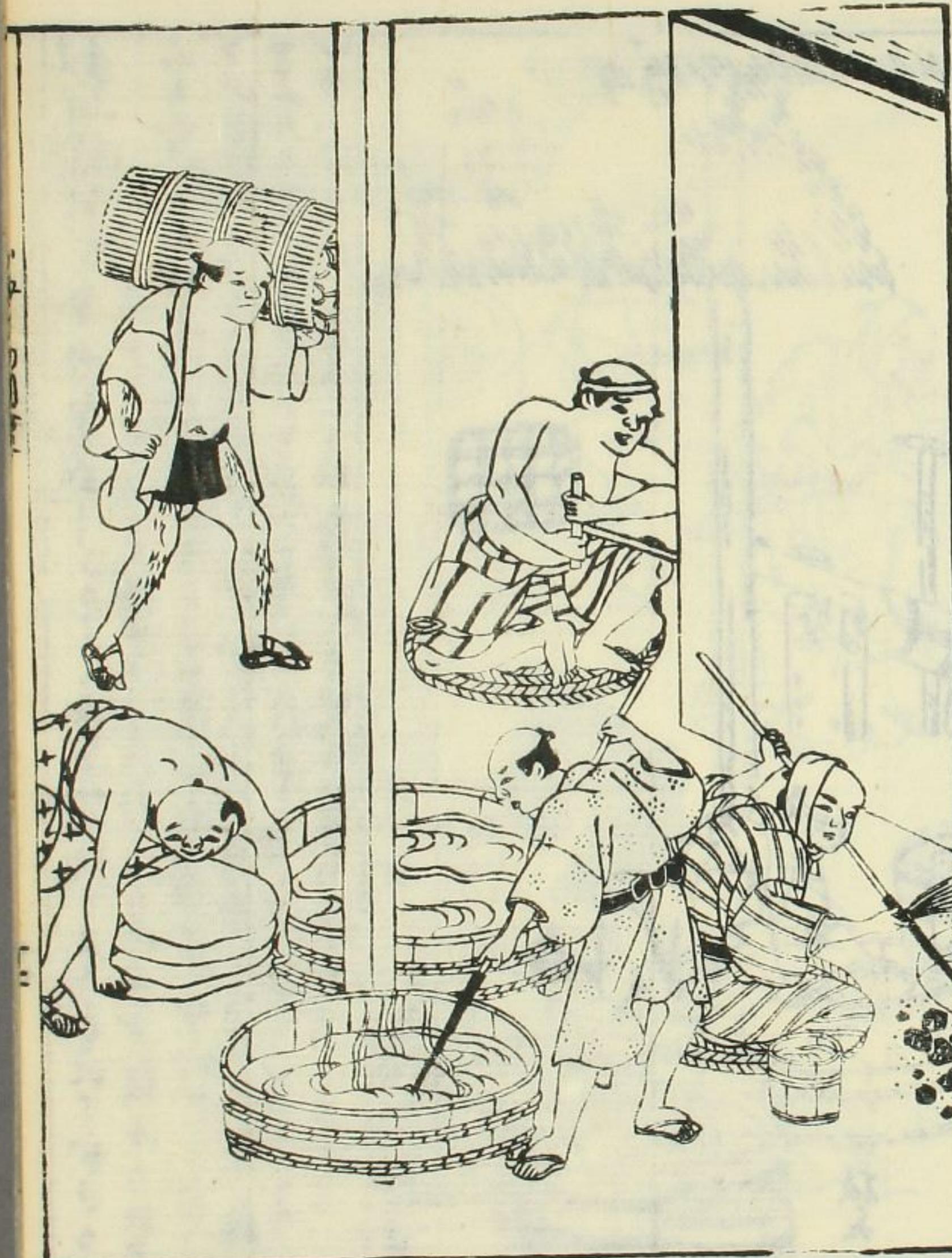
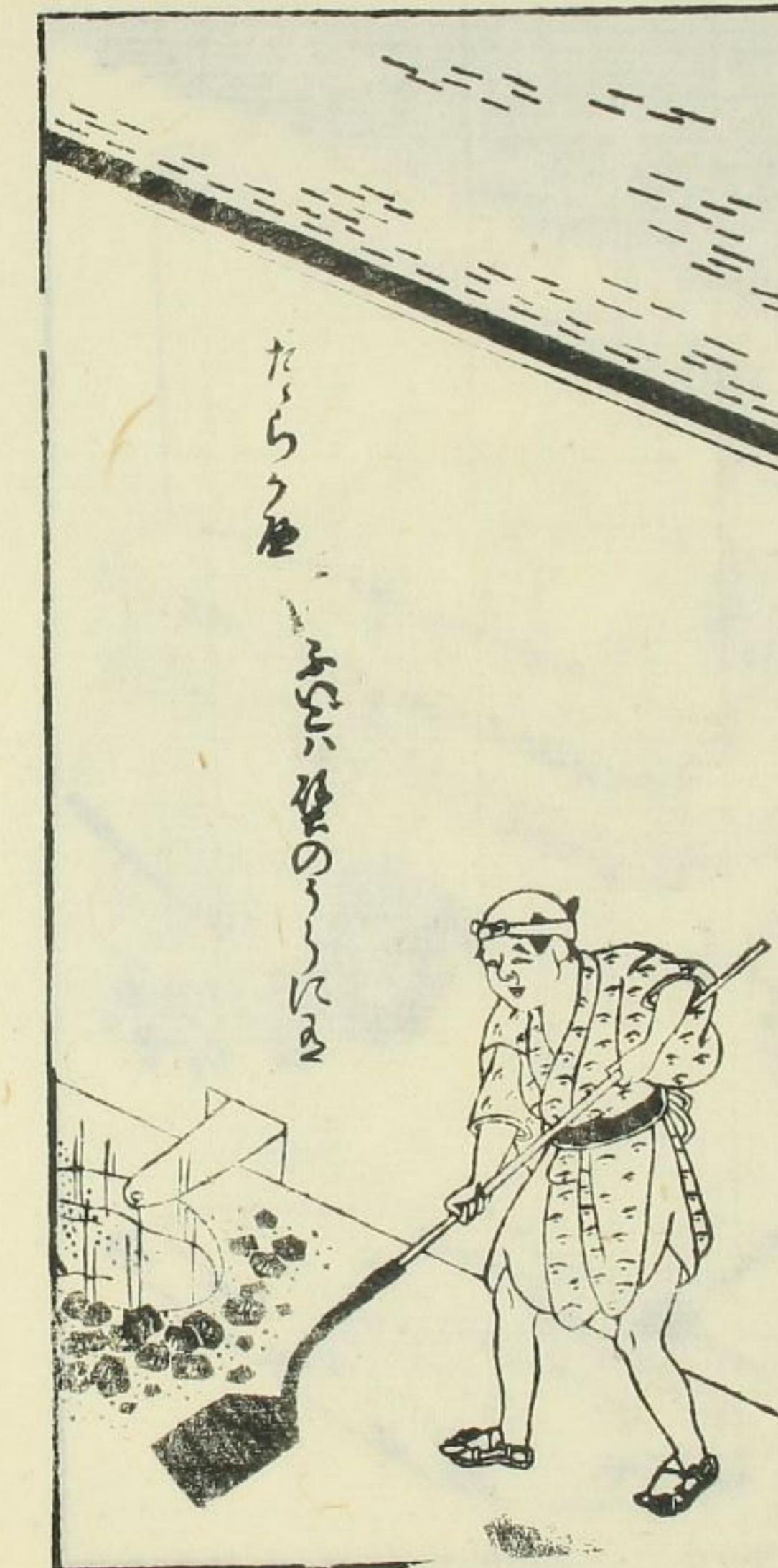
油が紀とひ六羽よう向ひ穀美とぬきとりて二本を  
うみ仕あげてうと羽毛色くわいどハニ延ゆ。こりとく。

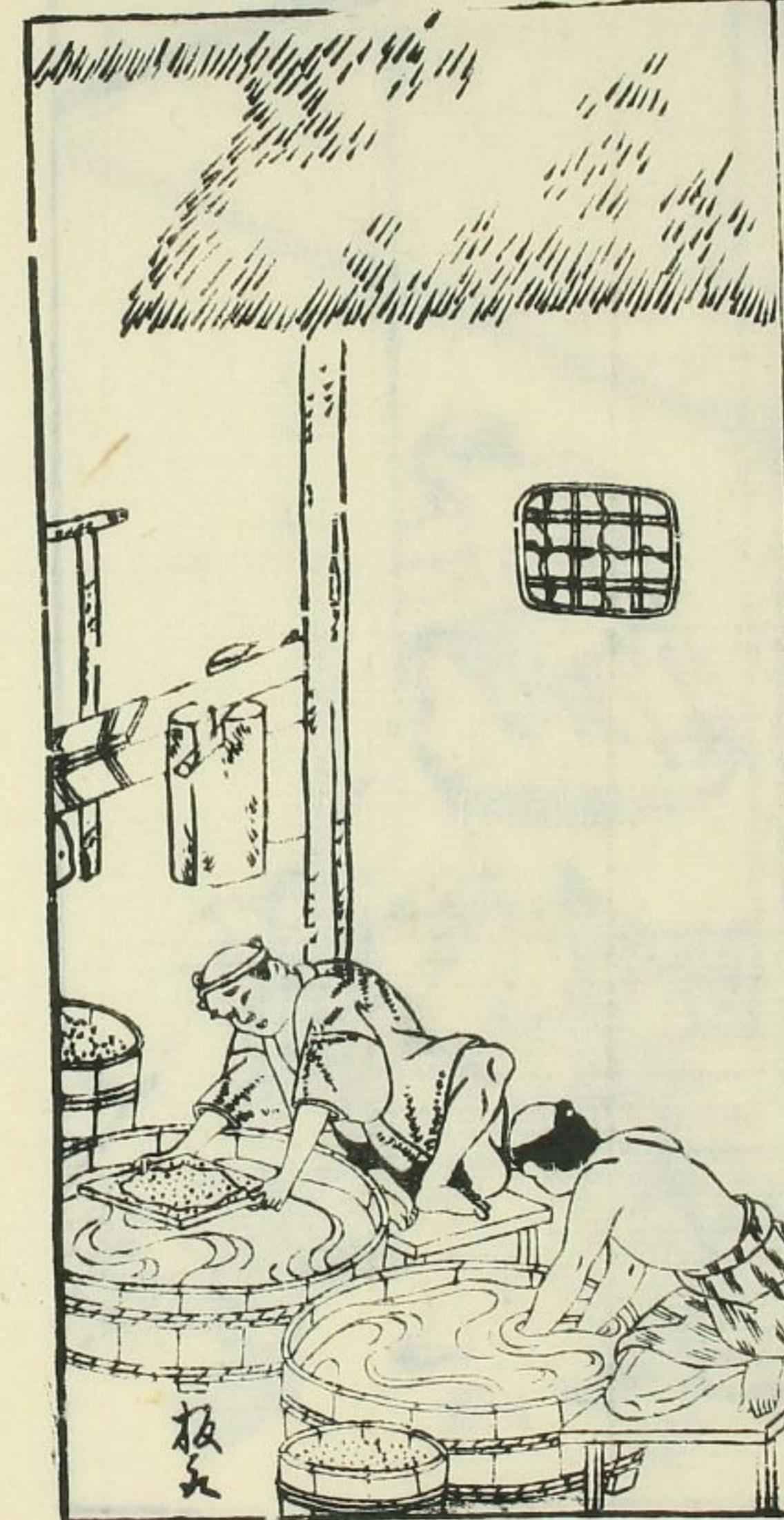
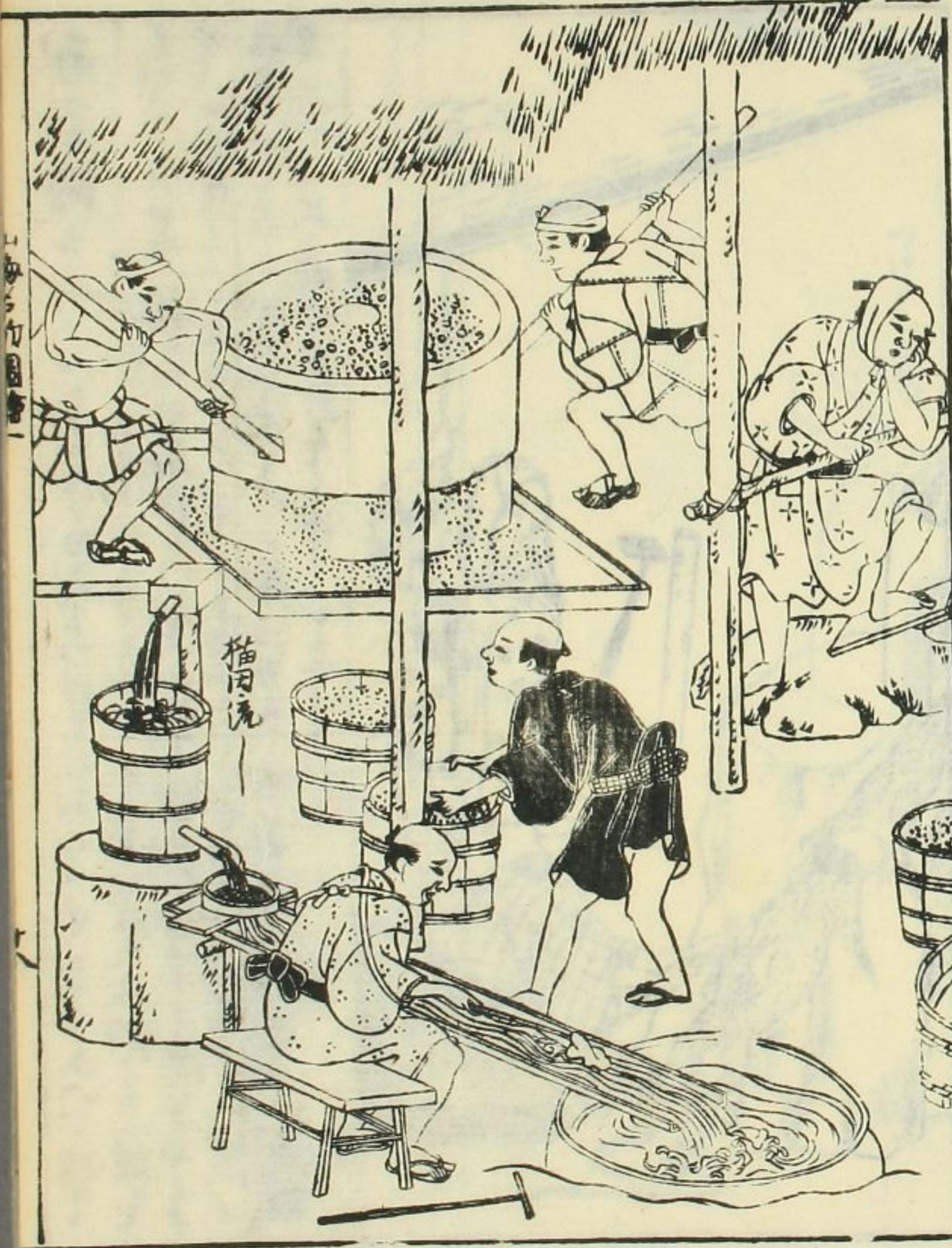
油ねさととうちるハキアシのトドリ。

方今集太半正の席半  
まくねかくを後の中華手よせ万細吉川乃ちもの下りけき

吉の半山ハ油中へ今も傳半そく多く後とおせり

たらう。





金山淘洗

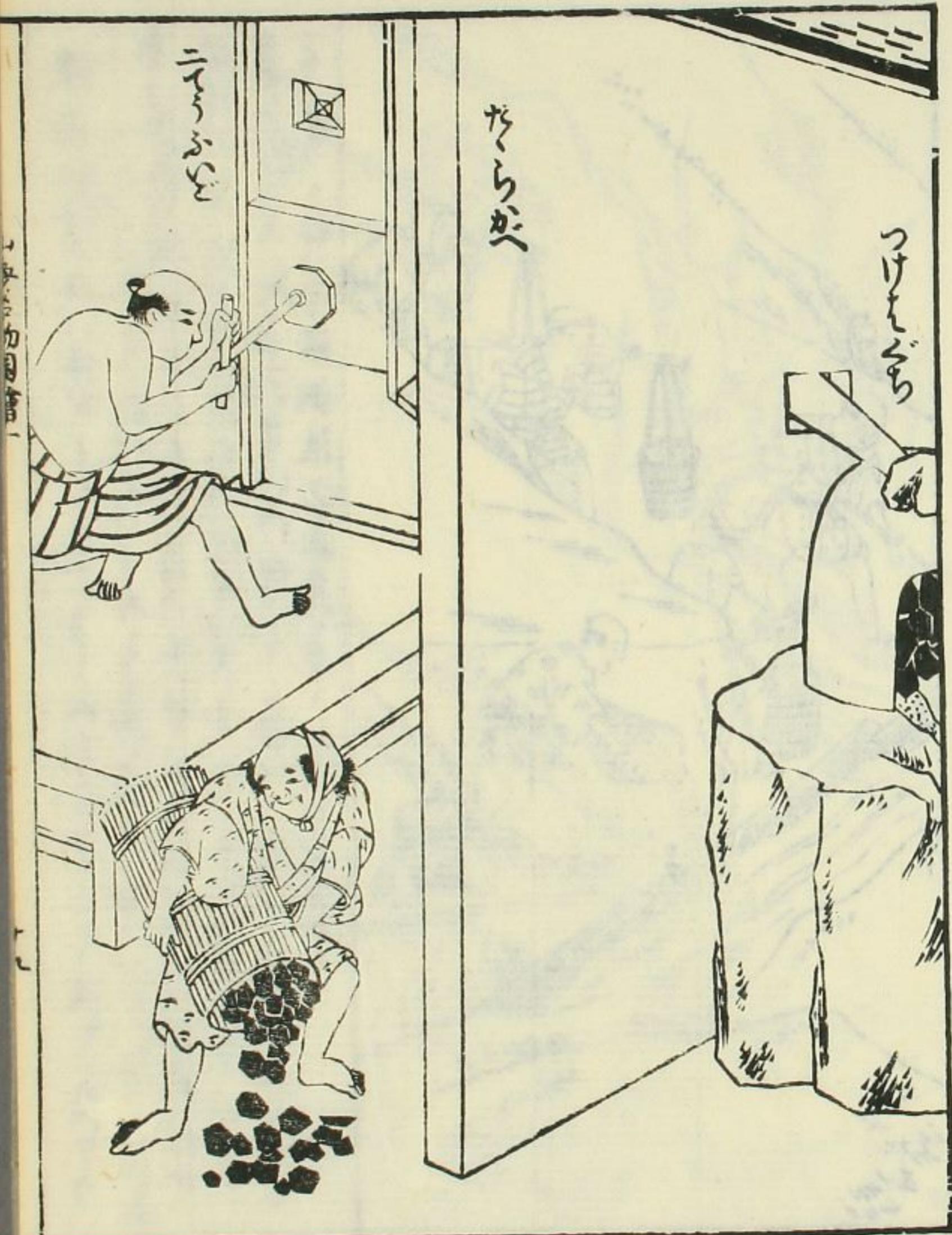
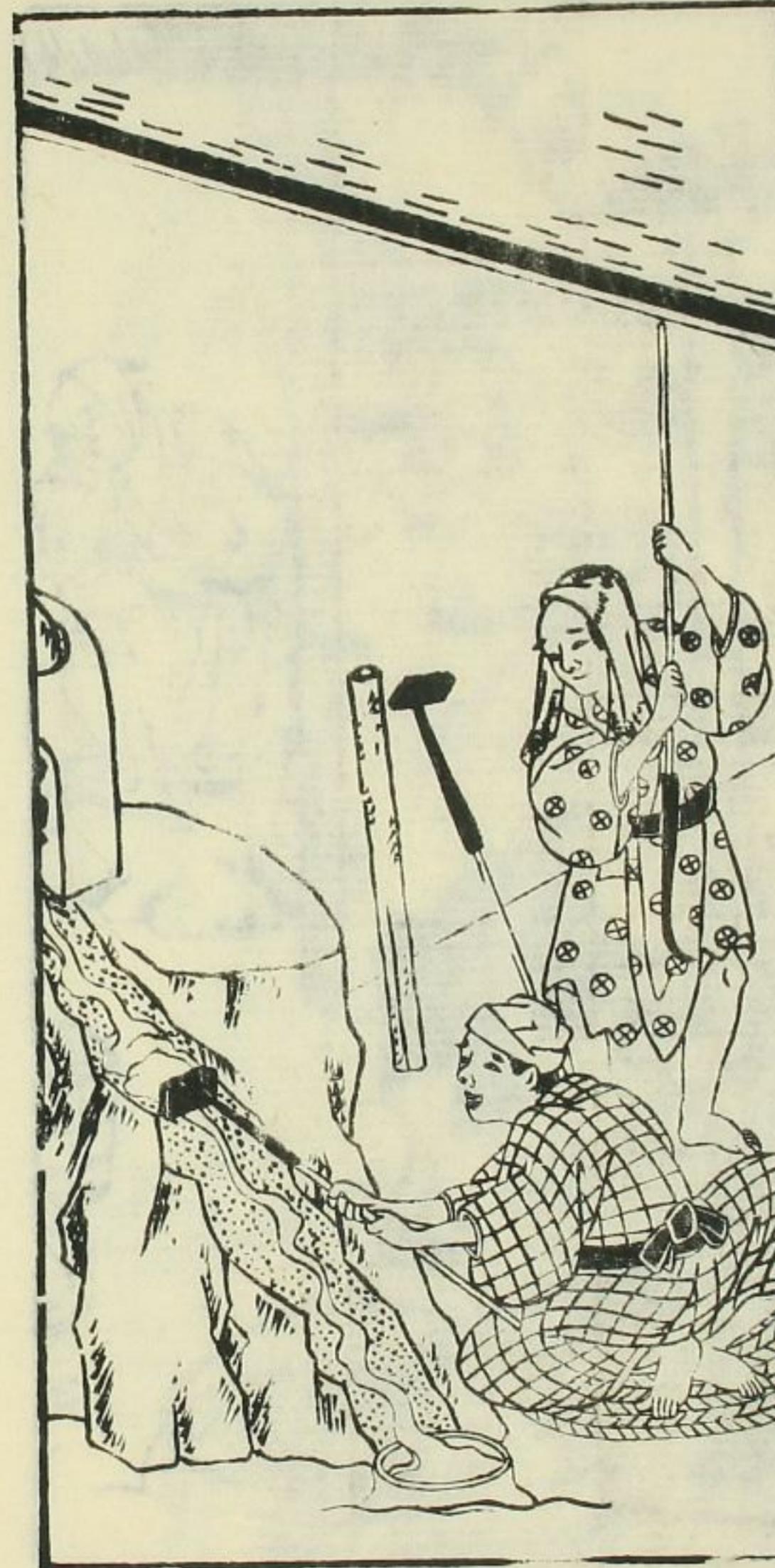
山海經圖說

廿

金山淘洗者 金山からお一とろもく石と浮んで石うとにておさう  
らうとすとつま猫田さづれあてて石の上と板やりひら  
くちせばそぞらき人深をこらしとおまのあと付さり令の粉とおで  
きの日めいとおととけんとせがはおおどち金とおでて黄金一とみうねる所  
まわがかりぬよ今ハそれもおとぎやれも地じゆうじゆうなう  
やうへものくよよこざれ差をくとひきハおら全ありべー

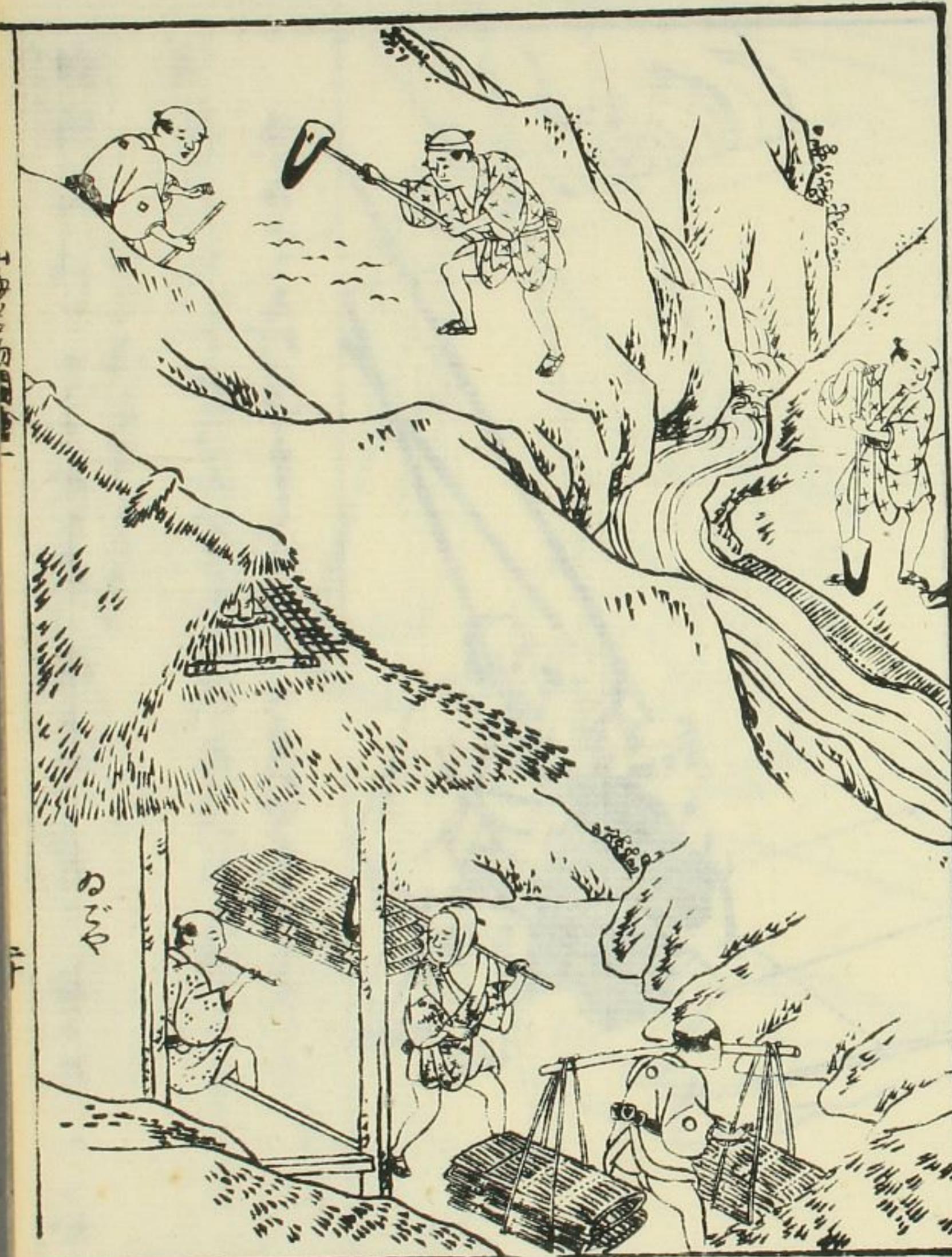
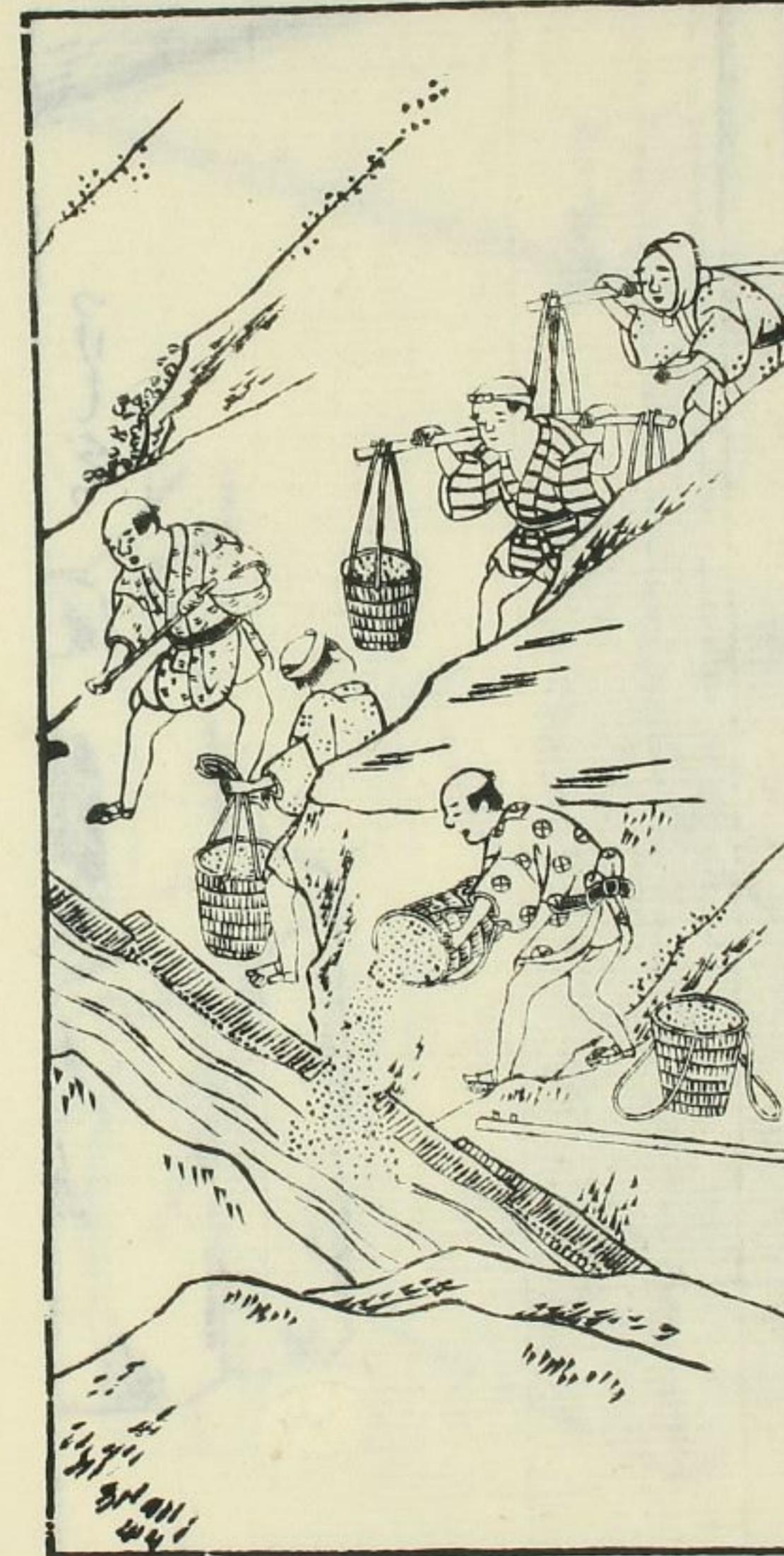
南蠻  
南蠻

さんだんふきんたらぶるつけもぐらうて二でうふいごにて  
すく也。網とうかぬとをもむり五よ用ゆくへ又網とうかぬと  
あがうれすむこと。用ゆくへ。金山の下鐵軒石にて室をあり  
おうての世つりれむのをうらとまよのく。金山の利。皆金山同乃  
鐵用とかねと唐の種類う約。禁はん。石を成。審後不疑。新吾為詛  
ひとと火蟲の身れとてヨーカー。



淡山の繪

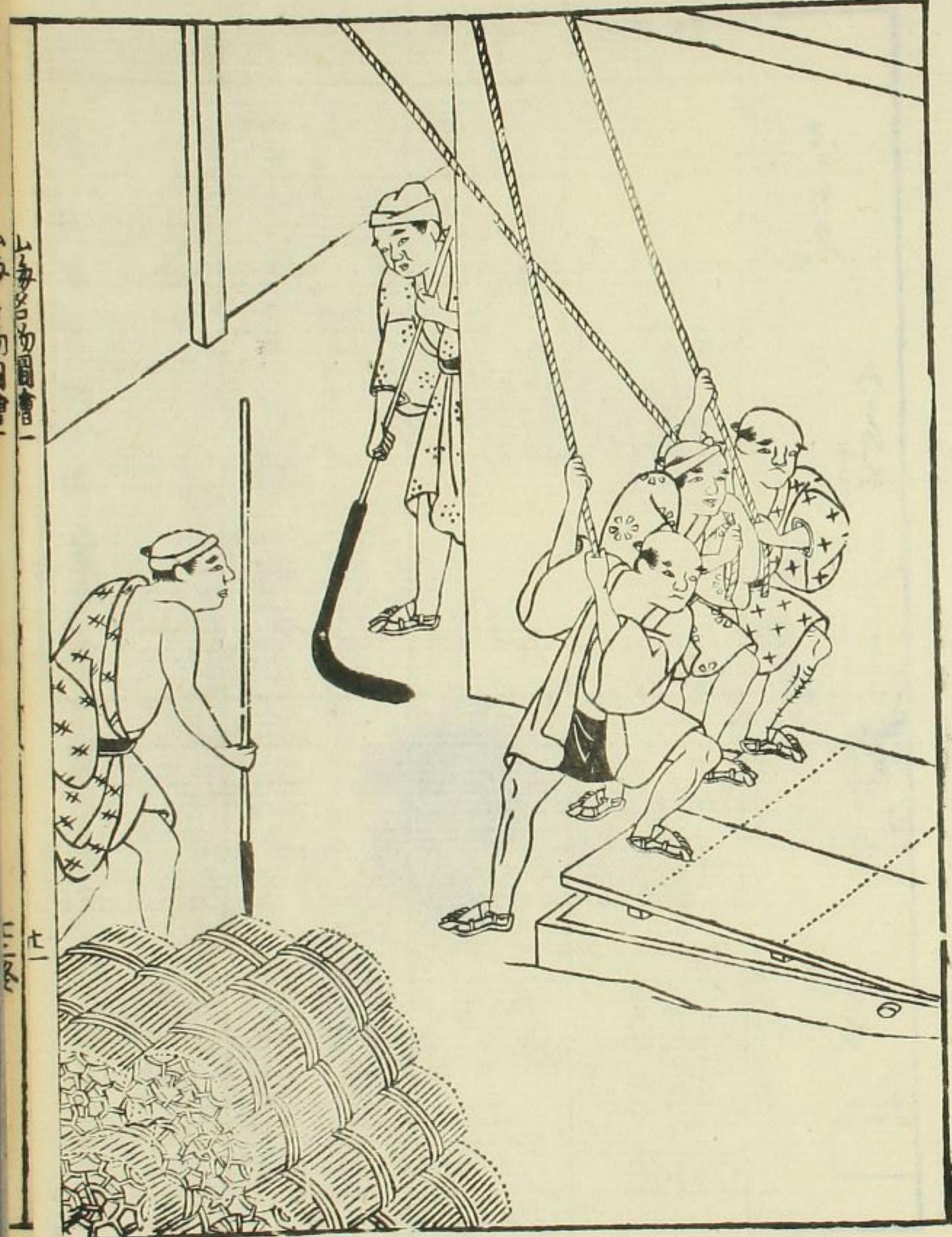
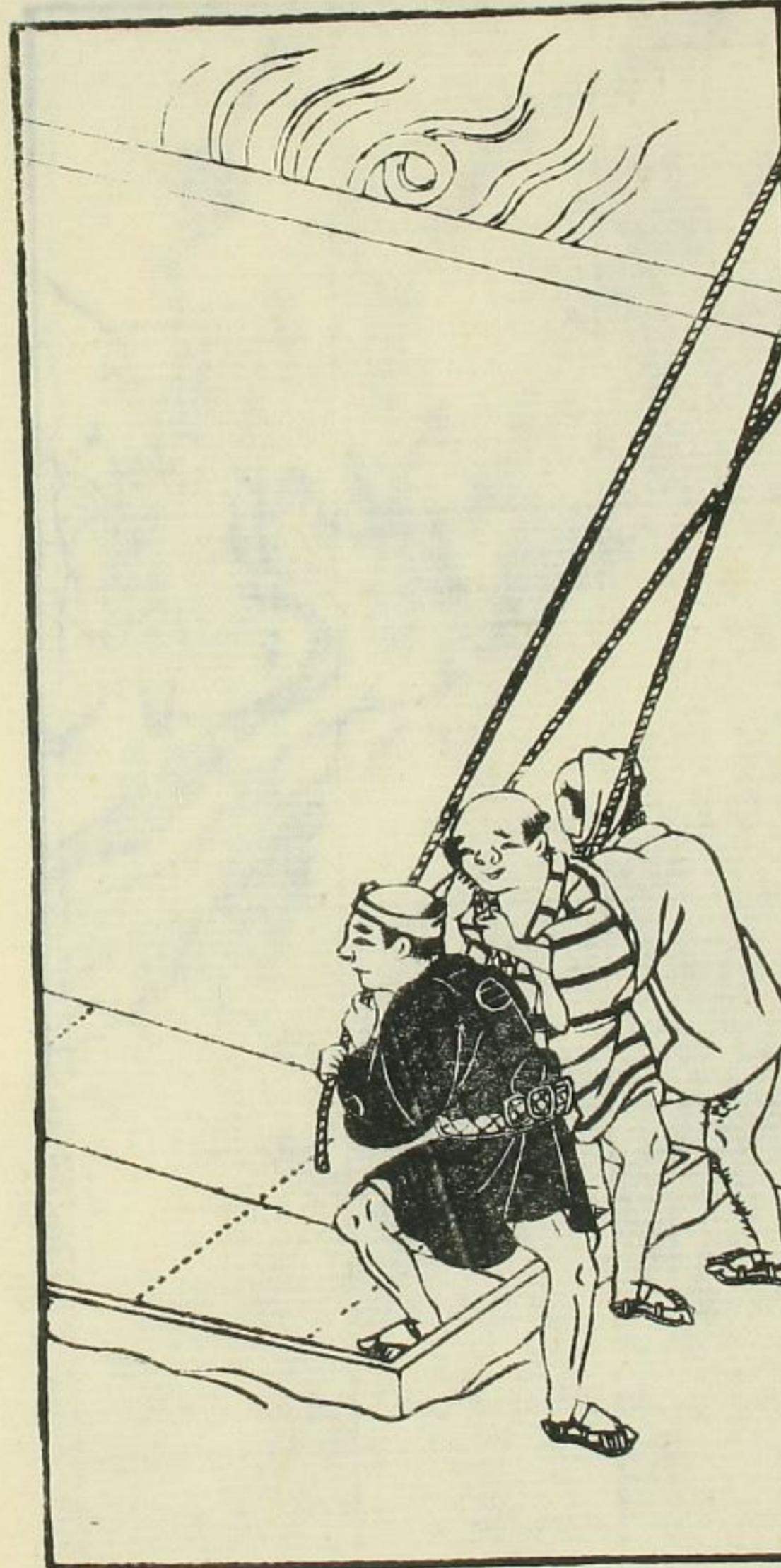
淡山の繪 淡山は一ノカ太な山にあひよきてて淡をえりたり  
あさき山川よりうとをぬとのとへあうだたる山を  
すうれば淡山のとよとあり古ハ皆なれけり。石見淡山  
山後の三ヶ國を多く淡あり山中には金をとる者もあらず  
集ニのせり延喜天皇の時附まで子供中よりかくねど居る  
をくらうね八金張網淡の惠名とて淡山人金あり



鐵踏鞴

旅をすよはまどもハ湯よりみく／夜よたへらよ  
りて湯よりみく

手をくわぢよもひんのかきこぬれつおふるどあぐる  
ぬねとおののゆきとゆきやあむくじゆくひあすて

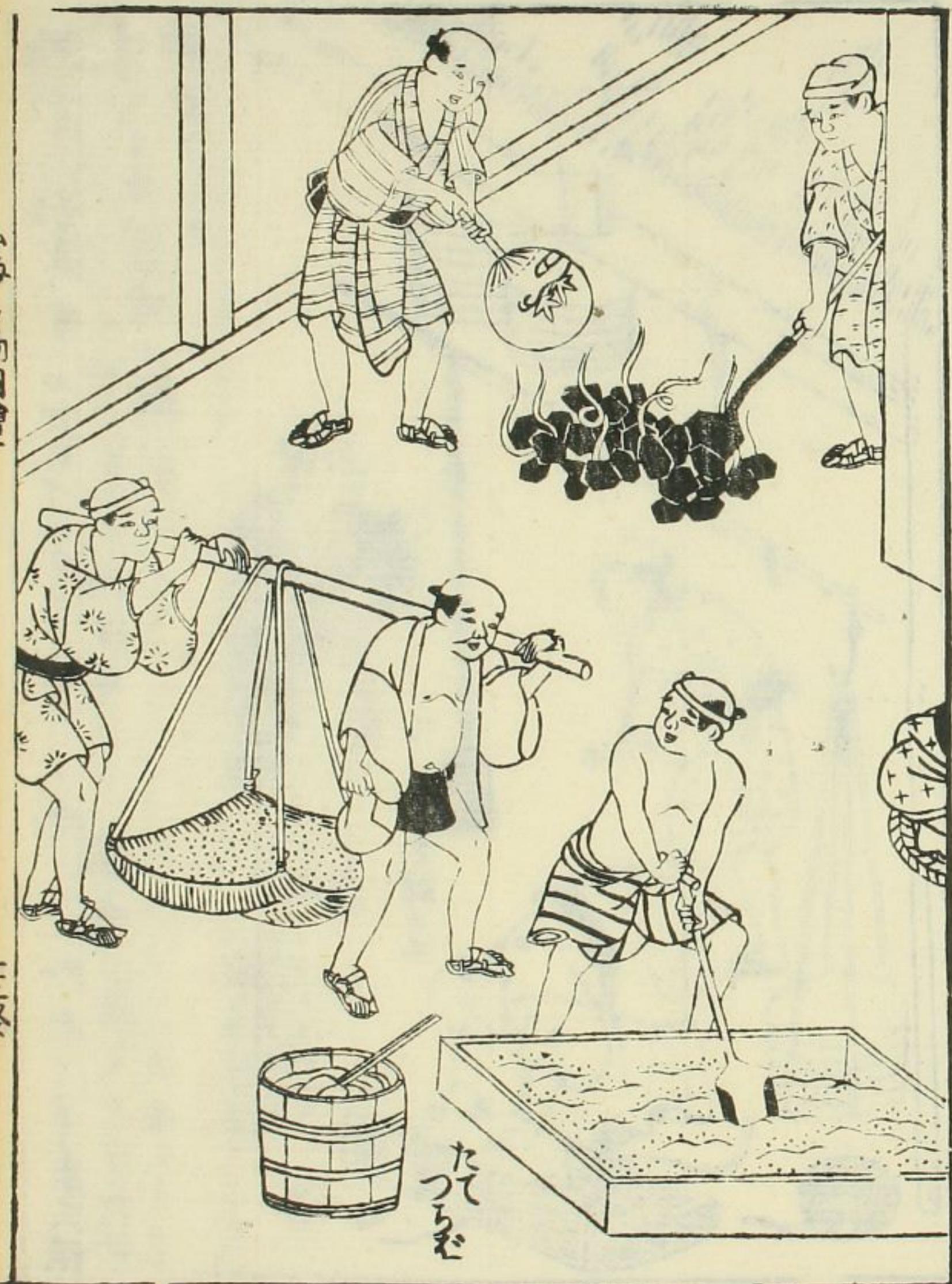


仄吹

仄吹ハ率て南蛮吹にて笛とちからも一尺と二尺て  
六この尺太毛をつきてすこやかに仄吹とよ沼のよ氣と號  
號と云又軟挺とも云余雅子ひらく白金あ生を詠てよき事なる  
ものと號と云又印子と云ハ准勅王劉敏と金のよ劉の字と  
さらばせらねる金なり續物志より

さらえ

あやめ  
もううみ



物語  
金匱方  
大坂  
五車龍端  
銅ハ堅強なりとあり  
刀紐とづるゆ人



早稻田大学図書館

011688995061